



合唱団被災地支援クリスマスコンサート



多和田葉子特任教授講演会



郡内織物手織り体験会



国井雅比古特任教授特別講演会

特集 さよなら「文大」..... 2

英文学科 奥脇奈津美 教授
社会学科 野畑真理子 教授

おくることば 4

初等教育学科 清水雅彦 教授
国文学科 長瀬由美 准教授
英文学科 儀部直樹 教授
社会学科 高田 研 教授
比較文化学科 水野光朗 准教授
大学院 中地 幸 教授

旅立つことば 8

初等教育学科 久田綾香
国文学科 阿部亮太
英文学科 佐々木研人
社会学科 浅沼勇希 / 小林未祐
比較文化学科 浅見文美華
文学専攻科 植田祐介
大学院 国文学専攻 鈴木美咲
国文学専攻 勇 晴美
地域社会研究専攻 霍 凤霞
英語英米文学専攻 棚田真理
臨床教育実践学専攻 謝 嬌

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 16

初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科（現代社会専攻 / 環境・コミュニティ創造専攻）
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより 31

国文学科（国文学科主催講演会）
国文学科（国語国文学会秋季講演会）
英文学科（英文学科・英文学会共催後期講演会）
ジェンダー研究プログラム（ジェンダー研究プログラム主催講演会）

文大だより 35

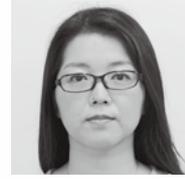
卒業演奏会を終えて
卒業制作展を終えて
イギリス遊学を終えて
都留文科大学合唱団 被災地支援コンサート
県民コミュニティカレッジ
ムササビ観察会
市民公開講座
地域交流研究フォーラム
edcamp を都留で開いて
郡内織物手織り体験会
道の駅つる 本学同窓会とのコラボレーション企画
編集後記
ぶんだい堂
お詫びと訂正

さよなら文大

退職教員からの言葉

さよなら「文大」

英文学科教授 奥脇奈津美



私が都留文科大学に赴任したのは2003年の春のことです。イギリスの大学での勉強を終え、日本の大学で教えながら言語学を探究していきたいと、研究者としての扉を開けようとしていたときのことでした。幸運にも故郷の山梨県の大学で教員職の機会に恵まれ、それから14年、質の高い学生たちと共に学び、近年では大学院での指導することもでき、教員として、また研究者として、楽しく充実した日々を送ることができました。

私は富士吉田市の出身です。高校は都留市内まで通学していました。富士吉田市内の中学校では教育実習生は文大の先生、通っていた塾でも文大のアルバイトの先生に教わりました。高3のセンター試験は都留文科大学で受験しました。このように、私の子ども時代は、文大との関わりが深い日々でした。そして大人になってから、何百とある大学の中で都留文科大学に職を得、教員として関わることができたことは、望外の喜びでした。子ども時代のみならず、大学教員として、また、研究者として、文大に育てられた思いがします。

教員としては、学生たちに恵まれたことが何よりも幸せ

です。全国津々浦々から山梨県までやってきた学生たち、都留文科大学に入りたくて努力を重ねてきた人、第一志望の大学ではなかった人、教員になる強い意志をもって勇んでやってきた人、さまざまでしょう。ただ、そんな学生たちも、数年たつ頃には、皆文大生としての香りをもつようになりました。そして、いくつかの香りをもつ人たちが集まり、ゼミに入り、日々のプレゼンや課題を協力しながらこなし、卒論の苦楽を共にするころには、深いつながりをもつ仲間となっていきました。まじめな姿勢で勉強に取り組み、真剣に話を聞く学生たち、そんな彼ら・彼女らに応えようと、私も必死に勉強を続けることができました。

個人的には、その間に3人の子どもに恵まれ、育児休暇を2回取得しました。出産し、育児休暇をとり、そのあと仕事に復帰できる環境が整っていたことは、ワーキングマザーにとって大きな安心でした。これまで、学生

たちには、学問上のことのほかに、社会の中でキャリアを積んでいくことの意味を伝えようと、微力ながら日々心がけてきました。結婚や出産後も男女問わず家事育児を分担し、誰のためでも金銭のためでもなく、自分自身のためにキャリアを継続していくことで、人生はより実り多いものになると感じます。このようなわたしの個人的な価値観を、ひとりでも多くの学生と共有したいと思ってきましたが、果たして伝わったでしょうか。

これまで充実した教育・研究の機会を与えてくださった大学、英文学科の先生方、教職員の方々、学生たちに、心から感謝しております。私の故郷にある第二の母校である文大を、これからもずっと応援していきます。

ありがとう、文大！



2012年度ゼミの卒業生たちと

都留文科大学のダイバーシティ教育

社会学科教授 野畑真理子



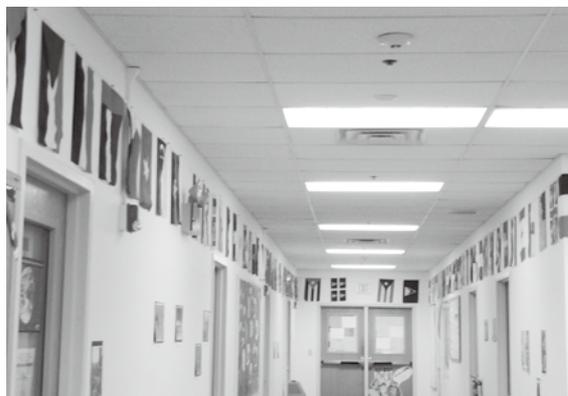
豪雪地帯で知られる上越で5年勤務した後、1992年に本学に着任してから25年が過ぎ去ろうとしています。私は長年、日本の女性労働問題を企業経営の特質との関連で研究してきました。1986年に男女雇用機会均等法が実施されたことで、女性が男性と対等に働くことができるようになることを期待しましたが、職場における男女平等（ジェンダー平等）はほとんど進みませんでした。このような事態を打開するために参考になりそうな国として、管理職中の女性比率が50%に迫る米国の企業経営とジェンダー平等について研究し、日本への示唆を得たいと考えようになりました。移民の国である米国では2000年代にはすでにジェンダー平等を超えて、ダイバーシティ（多様性）やワーク・ライフ・バランスなどの考えが社会で共有され、企業も率先して取り組んでいました。本学の一部の学生の間では「ジェンダーを勉強していると就職に不利だ」と言われているようですが、日本政府は近年、ダイバーシティや「働き方改革」を奨励しており、日本企業も昨年頃からジェンダー平等、ダイバーシティや「働き方改革」をどのように進めるかを真剣に考え始めた

ようです。今後も日米の取組みを比較研究しつつ、日本のダイバーシティが経済中心の偏狭な取組みに陥らないよう見守りたいと考えています。

本学では女性教員たちと協力して、ジェンダー・プログラムを2005年という日本では非常に早い時期に開始しました。学生の関心も高く受講希望者が多いため、一時は入門科目を3クラスに増設しなければならぬほどでした。学生たちからもっと早くジェンダーの授業を受けたかったという声もありました。本学の貴重な財産であり、受験生にもアピールできるジェンダー・プログラムをさらに発展させてくださるよう願っています。また、人権委員会委員として、本学のすべての学生、教職員が快適に勉学や教育・研究、就労できる環境が提供されるよう微力ながら努力しました。

LGBT（性的少数者）に関する講演会も2度開催できました。最初はLGBTの人びとを理解することを目的とした講演会、次に、本学が教員養成大学であることも踏

まえて、教師がLGBTの児童・生徒・学生にどのように向き合えばよいのかなどを話していただきました。当事者しか語りえない多くの具体例を知ることは、私にとっても貴重な体験でした。日本でも約20人に1人がLGBTとされています。一昨年（2015）には東京都渋谷区などが同性のカップルに男女の婚姻関係に匹敵するパートナーシップ証明書の交付を開始しました。また、文部科学省も全国の教育委員会に、具体的な事例を挙げてLGBTの子どもへのきめ細かな配慮を求めています。このようにダイバーシティは日本でも重視されるようになっていきます。全国から、そして海外から学生が集う本学がダイバーシティ先進大学としてさらに発展されるよう期待しております。



世界中から人々が集うコーネル大学、コミュニティセンターには多くの国旗が掲げられている

おくることば

しなやかな感性を
持って初等教育学科教授
清水雅彦

年を重ねてくるとこれまでの経験値から「さもある」と、結果が出る前から予測して、たいして努力もせず、にそれなりに渡り歩いていく……。何ともずるい人間になったなあ、と我が身を振り返っています。うまく事が運ばず落ち込むこともしばしば。ただそこに浸って動かないことはなく次へ始動できるのは、幼児性が抜けきれないのが幸いしているのかもしれない。何か楽しいことを思ったり、心動かされるようなものに出逢うと嬉しくなってしまう。反省が無い大人と言われればその通りなのですが、ポジティブに捉えれば、こどもの頃の“しなやかな感性”を持ち続けているのかなあ、と自分を肯定化しています。何でも無い生活の中にも新鮮な感動が溢れていて、そうしたことに逢うとワクワクするのです。

「しなやか」とは、弾力があってよくしなうこと、動きや様子が滑らかで、動作や態度が上品でたおやかなこと、と辞書に出てきます。そして「感性」は「理性」とともに「悟性」（物事を判断・理解する思考力や総合的知性）へと繋がる重要なものと認識されています。如何に心が柔和であ



卒演前のレッスンを終えて

るか、順応性を保てるか、立ち向かう制度や組織に融通性を持って臨めるか、こうしたことが私たち現代を生きる人間には求められているのだと思います。

世界的に愛されているキャラクター“ミッキーマウス”の生みの親で、ディズニーランドの創設者ウォルト・ディズニーは、次のような名言を残しています。

「どんな洗練された大人の中にも、外に出たくてしょうがない小さな子供がいる。」

「笑い声は時代を超え、想像力は年を取らない。そして、夢は永遠のものだ。」

「夢をかなえる秘訣は、4つの“C”に集約される。それは、“好奇心 Curiosity” “自信 Confidence” “勇気 Courage”そして“継続 Constancy”である。」

「夢見ることができれば、それは実現できる。」

きっと“しなやかな感性”を持ち“夢”を追いかけ、今や世界の人に“夢”を与え続けている彼の言葉を引用して、「おくることば」に代えたいと思います。

大学卒業によせて

国文学科准教授
長瀬由美

卒業おめでとうございます。皆さんが提出した卒業論文を読みながら、ともに学んできた日々を懐かしく思い起こしています。

三年生の頃から研究テーマをはっきりと定めて、地道に研究を深めていくことができた人、あれこれと迷いながら最後には面白い卒論を仕上げることができた人、一番調べたいことの手前の調査に時間を費やしてしまい、悔しく思っている人…。大学での勉強の集大成というべき卒業論文を書き終え、いま卒業を目の前にして、四年間の生活をそれぞれにやはり懐かしく思い起こしていることでしょう。

若い皆さんにとって、自分ひとりで一本の論文を作成するという作業は、おそらく人生初めての経験であったろうと思います。卒論を完成させるまでに皆さんは、自分が選んだ問題に対して、今現在の自分自身が出来るところまで調べ考えぬいたうえで、仲間や教員との議論を通して、その思考をさらに説得的に磨き上げていく、そんな体験をしたわけです。それぞれ就職活動や教員採用試験、その他もろもろの心配事なども傍らに

おくることば

抱えながら、最善を尽くしてやり抜いたことに誇りをもってもらいたいと思います。漠然と考えたり印象批評したりするのはと大きく違ったこの知的経験は、今後の人生、物事を判断すべき局面においてきっと支えとなることでしょう。

平安時代の歌人伊勢にこんな歌があります。

君が世は都留の郡にあえて
きね 定めなき世の疑ひもなく
（『後撰集』^{きりよ}羈旅）

^{ことばがき}詞書には「甲斐へまかりける人につかはしける」とあって、伊勢が、甲斐国に下った人に贈った歌だとわかります。地方官として下ることになったのでしょうか—当時国司は四年の任期で地方に赴いたわけですが—、都から遠く離れる不安な気持を思いやって伊勢は詠います。「あなたの人生、縁起の良い長寿の鶴の名が連想される、その都留の地にあやかって来なさいな。人生は定めないものなどと疑うことはなさらないで」と。相手を力づけ、背中を押すような歌ですね。

皆さんにも都留での大学生活が始まる四年前、励まして送り出してくれた人がいたことでしょう。今その四年間の生活を無事に終え、そしてまた新たに旅立つ時が来ました。この縁起の良い「つる」の地で学んだことや出会った人、その他もろもろの体験を糧にして、良き人生を築かれることを願ってやみません。

だけど three time (がんばる君のもとへ)



英文学科教授
儀部直樹

行くぜ one time
（一人つらい時も）
んで two time
（立ち上がれない日も）
だけど three time
（がんばる君のもとへ）
4 you! 大丈夫!
がむしゃらに行こう!

これは、音楽グループ GReeeeN のデビュー曲「道」(2007年1月発売)の出だしの部分です。みなさんもよく知っている曲ではないでしょうか。最近この歌は僕の中でのテーマソングのようなものになっていて、よく口ずさんでいます。以前は尾崎豊の「僕が僕であるために」が、長年僕のがんばれ自分ソングでした。尾崎の歌はわかりかし歌いやすかったのですが、GReeeeN の「道」には、ちょっぴりラップ風の要素が含まれているようで(?)、そのせいか、口を忙しく動かさなければなりませんので、これを完璧に歌えるようになるには時間がかかりそうです。この原稿を書いている今日は1月22日ですので、なんとか卒業式までには仕上げていくつもりです。別にみなさんの前で歌うわけではありませんが。

みなさん、ご卒業おめでとうございます。4年間、もしくは中にはもう少し回り道をした方もいらっしゃるでしょうが、これまでよく頑張った結果、みなさんは今日のこの日を迎えることができました。僕の授業を受

けてくれたことにも感謝しています。みなさんは、それぞれ違う人間ですが、大学での授業担当の先生や授業の教室という点で、たくさんの共通点を持った仲間です。僕はそれだけでも、人の人生の不思議な巡り合わせを感じます。みなさんは、今後様々な方向に進まれます。僕自身もこれまで何度も感じたことですが、なかなか儘(まま)にならないのが人生です。みなさんも、世の中は不公平だと思うこともあるでしょう。でも世の中、長い目で見れば、そんなに捨てたものでもありません。日々小さなことに感謝して、口癖のように「ありがとう」と呟いていると、みなさんが苦しい時に、思わぬ誰かがきつとみなさんを助けられます。みなさん、人生は長いです。短期間での結果で自分の価値を決めつけなくてください。企業経営者の石坂泰三氏(1886 - 1975)は「人生はマラソンなんだから、百メートルで一等をもらったってしょうがない」という名言を残しています。Life is a marathon, so what's the use of coming in first for just 100 meters?(ロジャー・バルバース英訳)。人生のゴールはまだまだ先です。「道」の中には「誰しも僕ら人生は一度!正しい道か誰もわからないけど、きっと人生はそんなところ、大事な気持ち、見失わず行こう」というフレーズがあります。僕もそう思います。この部分は早口で正確に曲に乗せていかなければなりませんので、みなさんを心から祝福、応援するために、僕は、卒業式まで歌の練習を続けます。最後のフレーズ「地面蹴りつけて進もう今の君の先へ」までしっかりと歌い切れるように。

おくることば

おくることば



社会学科教授
高田 研

ご卒業おめでとうございます。

昨年度は、4月14、16日の熊本地震で始まりました。みなさんの中にも実家や知人宅が大きな被害を受けた方もおられると思います。本校では5月から2回、社会学科、比較文化学科の学生が支援ボランティアに向かいました。そのチームを率いた一人が、現代社会専攻菊池ゼミの通称「パン」こと内山歩さんです。彼女は2年生だった2011年3月に東日本大震災を体験。いち早く物資仕分けのボランティアとして活動を始め、3年次には震災ボランティアサークルバーサスとして幾度も被災地でのボランティアを重ねました。

その後4年次から4年間休学し、NPO法人都留環境フォーラムに籍を置き、公的助成を受けて有機農業を実践的に学び、環境NPOとして様々なチャレンジを行ってきました。

その一つが地元の農家に伝わる野菜の“在来種”に注目し、その文化の背景を一つ一つ訪ねて小冊子を作りそれを商品化したこと。また有機農業の暮らし方をテーマにした様々な市民への“学びの場”を提供して来ました。

昨年4月に8年目の学籍満期を迎えたパンは大学卒業のために復学します。そして再び大災害に遭遇したことになります。彼女は比較文化学科7年生の旧バーサスの友人等と共に

一度解散したバーサスを復活させ、社会学科の1年生を率いて被災地に向かいました。そして東日本大震災で培った熱い想いを後輩たちに引き継ぎました。彼女たちがいなければ出来なかったバトンタッチでした。

多くの4年生諸君は希望の企業や公務員を目指した1年間でした。就職の状況も回復しているようで、私のゼミからは大手百貨店、地銀、消防庁、そして地方公務員と良い結果を出しています。しかし彼女の人生を考える物差しはどれも皆さんと違うようで4月から上野原市西原に農地を借りて入植し、次の人生の舞台とします。誰にも雇われずに土を耕し、そこに人生の種をまくのです。一度きりの人生ですが、そう慌てることもない“もう一つの生き方”があることを彼女は教えてくれます。

本校名誉教授の今泉吉晴先生の「ウォールデン森の生活」(上・下)小学館が文庫本になり、また訳も書き換えられてとても読み易くなりました。ソローは1845年から2年半、ポストン郊外の湖のほとりにある森の中に小さな小屋を建てて住み、野菜や豆を作って自給自足の生活を送ります。ここでの生活について書かれたのがこの本です。

のちの北米の環境運動や人権運動、またインド独立の指導者ガンジーにも影響を与えた、生き方を考える思想書です。これから始まる新しい暮らしの中で、いつかつまづくこともあるかと思います。そんなときにこの本の頁を開いてみてください。

私からのお別れの言葉といたします。

ど^{キジ}んなときもずっと雉子のように羽ばたいて!



比較文化学科准教授
水野光朗

みなさま、ご卒業、おめでとうございます。大空へと羽ばたいていく鳥のように、いよいよ世界へと旅立つ時を迎えました。

卒業されるみなさんに何か一言を、とのことです。あまりお役にたてるとは思えないのですが、一言ご挨拶を申し上げます。

実社会に出られると、これまで以上に判断や決断をしなければならないことが多くなります。その際、冷静さが重要であることは言うまでもありませんが、最も大切なことは、できるだけたくさんの情報を集めて判断することです。思い込みや偏見はよくありません。ここで重要なのは、「正しい情報」だけではなく、「誤った情報」や「間違った情報」も集めることが大切です。「この話はどうして誤っているのだろう」、「どうして間違った情報に振り回される人が多いのだろう」、「どうして間違ったのだろう」ととことん突き詰めて考えることが最も重要です。誤った情報や間違った情報を吟味することなく、ばつさり切り捨ててはいけません。

私の専門に引き付けて例を出しますと、現在、わが国は、隣国との間で領域をめぐる争いを抱えています。この争いへの対応策については、

おくることば

さまざまな考え方がありますが、その中の一つに、「相手はどうせ弱いだから、強硬策に打って出るべきだ」というものがあります。「拳で一回ゴツン！と殴れば、尻尾を巻いてこちらの言うことを聞く」というのです。私に言わせると、無謀以外の何物でもありません。なぜなら、相手はわが国が保有していない空母機動部隊や核兵器を持っており、とても勝ち目がありません。それなら対抗してわが国も空母機動部隊や核兵器を持てばよいのか、と言うと、予算がありませんし、そもそも核兵器を保有することなど法的に不可能です。

かつて、わが国は、いわゆる「一撃論」に基づき、国策を誤ったことがあります。現在言われている「強硬策に打って出るべき論」は、情報の取り扱いや情勢判断という点で、「一撃論」と大差なく、もっと情報の取り扱いに慎重であるべきです。過去の過ちを「誤りは誰が何と言おうと誤りだ」と頭から決めつけるだけではなく、「なぜ、どのような点で誤ったのか」も吟味しなければなりません。

雉子は、言うまでもなくわが国の国鳥です。見た目が鮮やかで美しいことはもちろんのこと、人体で知覚できない地震の初期微動を知覚できるため、人間より数秒速く地震を察知することができるとも言われており、極めて高い情報収集能力を持っています。どんなときもずっと雉子のように大空を羽ばたきながら大局的見地に立って情報を集め、判断や決断をしていきたいものです。

百万回、生きる



大学院研究科委員長
英文学科教授

中地 幸

子供時代に読んだ絵本に『百万回生きた猫』という絵本がある。作者佐野洋子の写真があって、彼女はライダーズ・ジャケットを着て大型バイクに乗っていた。なんてカッコいい女なんだろうと思った。しかし絵本のほうはあんまり感動しなかった。百万回生きた雄猫が最後には白い雌猫に恋をして、その後、初めて愛する人（猫）が亡くなるという悲しみに向かい合い、愛することの意味を知って死んでいく。百万回の生よりもたった一回の愛がある生が意味があるという絵本のメッセージは、子供の私にはなんだかありきたりな感じで、アピールしなかった。

そんな生意気な子供が大人になって常々思うのは、人は幾つの生を生きることができるのかということである。私たちの人生は一回切りである。しかし、私たちは他人の人生を深く知ることによって、ある意味別の人生をも生きることができると私は思っている。

昨年カリフォルニア大学パークレー校に調査に行った際に、野口米次郎が滞在したオークランドにあるホアキン・ミラー・パークを訪れた。1890年代、18歳の野口が滞在した家がまだ残っている。感動して歩き回ったら、友人とはぐれ、40分ほど行方不明になってしまった。友人は私が誘拐されたのではないかと心配してパーク・レ

ンジャーに電話してしまう最悪な40分を過ごしたのだが、その時私の心は百年前の記憶に憑かれていた。

そこには白い髭をはやしたミラーと老母がいて、ミラーの母は、日本から再訪してきた40代の野口との再会を喜びながらも、これが会える最後の機会であろうと涙する。日本とアメリカを簡単に行き来できない時代である。出会いは別れでもあるのだ。

小山の上にあるミラー・パークからは、彼方にサンフランシスコ市街が見えた。高台から景色を眺めていると、自分が誰なのかわからなくなった。人間というのは、どこまでが個人であるのだろうか。

佐野洋子が描く猫は、ある時は王様の猫、ある時は船乗りの猫、ある時はサーカスの猫、ある時は泥棒の猫と、様々な生を享受した猫である。飼い主たちは猫が死んだ時悲しむが、猫は全く悲しまない。百万回の生は、猫にとっては、「俺は百万回も死んだんだぜ」と自慢する出来事に過ぎないのである。

しかしながら逆説的だが、作品の魅力は、絵本が最終的に投げかけたメッセージとは反対のところから派生しているように思われる。猫の魅力は百万回生きたところにある。百万回生きてこそ、猫は初めて生を「完成させる」のである。

ならば、私たちも百万回生きてみよう。人文学という人間を理解しようとする学問にたずさわった文学研究科の修了生たちは、すでに百万回生きた猫の道をたどり始めているともいえる。これからも様々な人生の万華鏡をのぞいていこう。百万回の生には、百万回以上の愛も見えてくるはずである。

旅立つことば

都留記

～濃厚な4年間を振り返って～

初等教育学科4年
久田綾香

伊勢の地におぎゃあと生まれて18年、ずっと両親に守られ育てられてきた私が初めて家を出て一人で生きていくことになった。第一番の目的はかねてから強豪校として名の知れた都留文合唱団に入団し、全国1位を取ることであった。誘惑の多い大学生活だが、部活だけは一切手を抜かず、自分の信念を貫いた。そうして2年生の時の大会で全国1位を取ることができた。中学生の頃から憧れていた夢の舞台での名誉ある受賞は感動のあまり震えが止まらなかった。3年生のときは学生指揮者を務め、技術面での音楽的な調和だけでなく、人間同士の調和も考えた。細部まで神経を尖らせ、50人以上という大所帯を牽引する大変さ、たとえ嫌われたとしてもはっきり言わなければならない時の辛さ、そして周りの人たちの協力のありがたさや優しさなど、多くのものを感じることができた。紆余曲折あったが学生指揮者という立場に立てたからこそ広い視野でものごとを見ること、音楽の魅力の深さに気づくこ

とができた。これらの経験はこれから生きていく上での最大の糧になるだろう。

学業の面では、現場に対応した指導案作成や教育法など専門的な知識を身につけ、教育実習やSATという場で実践した。各々が現場で感じたことを授業内のグループワーク等で発表、共有し、子どもたちの未知との遭遇や新たな発見を演出するためにはどうすれば良いか試行錯誤をする時間は新鮮な学びとなった。また、音楽専攻声楽ゼミに所属し、専門的なレッスンと年に2回のコンサートを通し、発声法や表現力の習得、常に逆算をしながら日々努力を重ねることの大切さに気付くことができた。

振り返ってみれば走馬灯のように駆け抜けた4年間だったが、こんなにも成長し、深い学びができたのは人と人の距離が近く、あたたかい環境があったからだろう。私の学びの原点は都留にあり！といっても過言ではない。先生方や仲間たちとの素晴らしい出会いに感謝をし、得たことを忘れず、これからも私らしく全力で前へ進んでいきたい。



長崎県で行われた全国大会にて

旅立つ言葉

国文学科4年
阿部亮太

私が青森県の十和田市から、ここ山梨県の都留文科大学に、期待と不安を膨らませながらやってきてから、もう4年の月日が経った。入学当時は、慣れない土地ということもあり、わからないことばかりで右往左往していたのも、今は遠い出来事のように思われる。

私の大学生活の大半を占めたのは、ソフトボール部での活動だ。今までソフトボールをやっていた経験はなく、野球すらやったことがない私が、なぜ大学に入って突然ソフトボールを始めたのかは、今となっては自分自身でも理解ができないが、「新しいことを始めたい」という気持ちによるところが大きかったのだろうと思う。軽い気持ちで入部したソフトボール部であったが、私にとっては、大きな試練となった。まっすぐボールを投げることすらできない私にとって、週5日、野球やソフトボール経験者の中で競い合っていくことは、考えていたよりも過酷なものであった。そんな部活動を最後まで続けることができたのは、部員たちの人柄と、3年になってから任命された体育会役員との絆によ

旅立つことば



鶴鷹祭にて

るところが大きい。体育会役員として、ソフトボール部の一員として過ごす毎日は多忙で、嫌になることもあったが、とてつもなく充実した毎日であったと卒業を間近に控えた今だからこそ強く思う。

来年からは宮城県で高校教員として、日本の未来を担う生徒たちの前に立つこととなる。4年前と同様、慣れない土地で過ごすことは簡単ではないだろう。しかしながら、「新しいことを始めたい」という少しの冒険心のおかげで、充実した毎日を送ることができたという経験は、私のこれからにとって大きな財産になるだろう。常に修養を怠ることなく、新しい物事に挑戦し続ける教員生活を送っていききたい。

最後となってしまったが、中古文学ゼミで細やかな指導をしてくださった長瀬由美先生をはじめとして、4年間でお世話になったすべての方々への感謝の言葉を述べて、結びと代えたい。4年間本当にありがとうございました。

「大学の意義」

英文学科4年
佐々木研人

「都留は田舎だ」というクチコミをインターネットで見てもなく、電車を乗り継ぎ、この地に降り立った。秋田の実家のある場所よりも田舎なんてそうそうないのだと、その時に悟った。今ではこの暮らしやすい街並みに愛着と感謝の意が溢れて止まない。

この大学に入学した時、私の勉学に対する意欲は高く、寝る間も惜しんで勉強した。学校の宿題の量は多いながらも勉強ができることを喜んだ。そのように勉学に勤しむ中で、私が唯一4年間夢中になり、ずっと続けたことがある。サークルである。私が入ったサークルは、自然の中で子供とキャンプをするという自然教育に関するもので、都留市と北杜市を中心としながら山梨の自然を活かし、年中から中学3年生まで幅広く活動を行った。私は将来の夢が教員であったこともあり、自然教育活動での経験は役立つことばかりだった。話し方や叱り方、子ども自身の成長の仕方やその手助けの仕方、様々なことを学んだ。教員採用試験ではその経験が評価され、卒業後は無事に教員としての人生を歩むことができることとなった。



オーストラリアで友人と

サークル活動や授業等の学生生活を送る中で、私は多くの仲間たちを得た。先輩や後輩、そして多くの同輩たち。私はいつも彼ら、彼女らと時間を共にし、どんな時も楽しかった。私がオーストラリアに留学をしている間、友人の1人が日本からオーストラリアの私のところに遊びに来てくれたことがあった。その決断と行動力に驚かされたが、会いに来てくれたことが何より嬉しかった。大学という場は勉強をするところである。学生の本分は勉強であることは間違いない。しかしながら、大学で得られるものは授業での知識や意見、サークルで得られる貴重な経験のみではなく、学生生活を共にする仲間たちの存在があることは明らかである。

そのような素晴らしいサークルや素敵なお仲間たちをつないでくれた大学、大学に行くことを許してくれた両親、学生生活を共に送ってくれた仲間たちに心からの感謝を示したい。ありがとうございました。この田舎へ来て本当に良かった。

旅立つことば

「自分の人生は自分で決める」



社会学科4年
浅沼勇希

振り返れば4年間はあっという間だった。入学式がつい昨日のここのように思われる。この4年を振り返れば、実にいろんな人との出会いがあった。学科、ゼミ、サークル、部活、バイトなど多くの人と触れ合い、人として大きく成長できた4年間だったのではないだろうか。

多くの人に支えられ過ごした、都留文科大学をいよいよ卒業する。それぞれの道に進んでいくことになる。何を想い、何を考え、その道を進んでいくかはその人しか知らない。己の欲求に実直に生きていくのもありだろう。誰かのために一生懸命になって働くこともありだろう。何をしてもいいと思う。正解はない。ただ、自分に嘘をついて生きていくのだけはやめた方がいいと思う。これは何も卒業生だけに限ったことではない。これから生きていく中で、様々な人や困難に出会うことになる。そんな時に「はいそうですか」と言われたままに動いていては何も変わらないし、人生は楽しくない。「自分の人生は自分で決める」都合のいいときだけ使う者が多すぎる。実は分かっているも結局のところ他人に染められ



アカベラ集合写真

る人は少なくない。今自分は何をしたいのか、何をすべきなのか、どう感じているのか、何を見ているのか。よく考えた方がいい。世の中、マジョリティーが正しいわけじゃない。サイレント・マジョリティーは沢山いる。その中の一人になるのは簡単だ。でも、ノイジー・マイノリティーの方が絶対人生は楽しい。何が真実で、何が正しいのか。これを見分けるのは難しいが、その先に目指すべきものがあり、それが生きがいとなってくるはずである。

この4年で何を学んだかはもちろん大切だが、これからどう生きるのかがもっと大切になってくる。限りあるその「命」を是非全うして欲しいと思う。そして「ああ、自分の人生は本当にいい人生だった」と思えるような生き方をして欲しいと願う。

最後になったが、関わって頂いた多くの皆様に深い感謝の意を申し上げ、最後の言葉とする。

「もうひとつのふるさとに」



社会学科4年
小林未祐

慣れないスーツとパンプスでうぐいすホールまでの坂を歩いたのが懐かしい。あの日、知り合ったばかりでぎこちなく接していた友人と、もう1人の友人を加え、私は大学3年の秋、三町商店街の隅に私設の図書室「つまち図書室」を始めた。

毎日、講義を受け買い物をして1Kのアパートへ戻る。たまにバイトへ行き友人と遊ぶ。そんな繰り返しの生活にもったいなさを感じたのは大学生活が1年と半分過ぎた頃だった。2年の夏に集中講義「ワークショップ演習」を受け、私の大学生活は一変した。自分自身の生活を豊かにするためにコミュニティを手段とする「コミュニティ・ベネフィット」を学び、私は「本に囲まれて生活する」という夢の実現を考えた。これに2人の友人が共感してくれた。そして、先生と外部聴講の市民の方々に背中を押していただいたことが計画の実現への1歩となった。

図書室となる空き家を探す際には、市民の方が空き家の情報をくださった。空き家の大家さんは「文大生なら」と快く応えてくれた。何かをしようと思うとき、そこには必

旅立つことば



図書室オープン記念イベント

いつかの私へ

比較文化学科4年
浅見文美華

ず見守り、力を貸して下さる都留市の方々がいた。図書室を創り、運営していく中で様々な方と関わりあい、時には私たちの進路や卒業論文の相談まで聞いてくださり、そのたびに優しく受け止めてくださった。

なんとなく大学生をしていた頃の私にとって「帰る場所」は地元であり、両親のいる家であった。しかし、こうして4年を終える今、都留の町も私が「帰る場所」だ。都留へ帰ってくれば、私たちの創った場所があり、私を迎えてくれる人がいる。地元で就職が決まり、都留を離れることは決まっているが、私はいつでもここに帰ってくる事ができる。その時、胸を張った私でいられるよう、これからの生活を充実したものにしていきたい。

私の都留での生活を見守り、活動に力を貸して下さった先生と地域の方々、常に心配しながらもやりたいことをやらせてくれた両親、そして私とともに図書室を創ってくれた大切な友人に心から感謝を。

5年前、私がこの都留へ来たときに漠然と決めていたのは、「大学生活中、一度は海外で暮らす!」ということでした。そして幸運なことに、良縁に恵まれてベトナムの日本語学校で1年間お世話になることができました。2014年の3月、私はあるプログラムによって成田を発ち、ワクワクを胸にベトナム中部・ダナンの日本語学校へ配属されました。

結論から申し上げますと、私のベトナム研修はお世辞にも成功とはいえませんでした。私が接することになったのは日本語学習中のベトナム人学生です。練習のためにも主な会話は日本語で行うわけですが、もちろん、日本人と同じように話しかけては通じません。相手の学習レベル、習得語彙に合わせて的確にこちらの意図を伝え、また相手の意図を汲み取らなければなりません。しかしもともとお喋りがあまり得意でないのもあり、わかりにくいと離れていってしまう学生も多くいました。コミュニケーションがうまく取れないことで仕事でも失敗ばかり、無力感だけが募っていきました。挙句、自分は何もできなかったし何も

得られなかった、という思いを抱えて私は成田へ帰ってきました。

しかしそんな私でも帰国後にはベトナム生活の成果を実感することになります。ちょっとやそつとじゃへこたれないメンタルを手に入れましたし、以前はできなかった自分の意思表示を（図々しいくらいに）するようになりました。そして何より、ひらがなを教えていた学生が「今度は留学して、日本で会いましょう!」という約束を果たし、今でもよき友人でいてくれているというのがベトナム生活最大の誇りです。

つまり何が言いたいかというと、せつかくの人生、何かチャレンジしないと勿体無い!!ということです。そしてその結果何も残らなかったとしても、それでいいのです。今はそう思っている、いつかどこかで必ず見つけた何かに気づける時が来ます。1年海外で生活しろとは言いません、頑張った!と自分が思えることならなんでもいいと思います。その頑張りが、いつかの自分を強くしてくれる。これを信条に、これからの人生も歩んでいきたいと思えます。

旅立つことば

「都留での繋がりを次へ」



文学専攻科
植田祐介

この専攻科で学んだ1年間は、今までの大学4年間で学んだことと合わせ、私が中学生の時から憧れを持つ、学校の教員になるための大きな糧となりました。私は、2016年3月に学部を卒業後、教壇に立つ際にはもっと様々なことを知る必要があると思います、4月に専攻科へ入学しました。専攻科では個性豊かで楽しい仲間たちと、毎日様々な先生方から様々なことを学び、その内容について議論し、自分の認識の広がりを感じる事が出来ました。

私はここで、1年を通してアクティブ・ラーニングについて研究をしました。専攻科で研究を進めていく中で、他の仲間の研究のテーマを考えたり、逆に私の研究の際に、子どもの貧困やいじめの問題などほかの角度から考えたりすることが出来ました。昨年までの学部時代とはまた違った研究をこの専攻科では1年を通して行うことが出来て、教育に関わる問題を多角的に考えることで、今までに持ち合わせなかった見方をすることが出来ました。じっくりと教育について、自分が行いた



い教育について考え、議論し合うことが出来ることも、この専攻科だったからこそだと思います。講義の内容もどれも刺激的で、実践記録から現場の子どもについて、様々な文章から今の教育に求められていることを知る事が出来ました。私はまだ現場について知らないことばかりだったので、その講義のすべてが私の今後活かされる内容だったと思います。教師の役割や子どもたちとの関わり方について深く考えることが出来ました。

最後に都留文科大学で専攻科を含め学んだこの5年間は、多くの人たちと出会い、多くのことを学ぶことが出来たかけがえのない時間でした。ここで学んだたくさんをこれから忘れずに、全国の仲間たちと喜びや苦勞を共有しながら、子どもたちと共に成長することの出来る教師になっていきます。この5年間お世話になった多くの方々へ心より感謝申し上げます。

「光風霽月」



大学院国文学専攻
鈴木美咲

厳しい寒さがうっすらと残りつつも、暖かな日の光を感じるようになってきた。都留に春を感じはじめる頃、私たちは卒業する。校舎を見上げると、これまで過ごしてきた日々が思い出される。

私が都留文科大学を志望した動機の一つに、教員免許を取得できることがあった。しかし、入学オリエンテーションで、ある先生の在学中資格は取れるだけ取ったほうがよい、という言葉が印象に残った。その後、履修可能単位数を限界まで利用して、中学校・高等学校教諭一種免許状、学校図書館司書教諭課程、図書館司書課程、日本語教員養成課程、ジェンダー研究プログラム課程を取得した。人よりも忙しい日々ではあったが、充実した大学生活を送りつつも、自身の力で将来の幅を広げることができた。

私はさらに高い知識をつけるため、大学院への進学を選択した。そこである先生の実物に触れる機会を作りなさい、という言葉から、東京や神奈川、茨城や広島博物館や文学館、資料館を訪れ、また京都にも赴き実物の史料などを見てきた。学部のときにはできなかった、学外で学ぶ

旅立つことば



ティーチングアシスタントの様子

現場の教師が
学び続けること大学院国文学専攻
勇 晴美

機会を作り、知見を広めることができた。

六年間を振り返ってみると、様々なことに挑戦し、強く、逞しく成長していく自分がいたと思う。また人とのコミュニケーションのなかから、多様な価値観や解釈があることを知り、物事への見方を変えることを学べた。このような経験ができた、都留文科大学の環境は、私にとって本当に良い影響をもたらしてくれた。

光陰矢のごとし、卒業まであっという間であったが、限りある時間を大切に有効活用することができた。そのなかから得た経験は、現在私の強みとなっている。今後はそれを活かして、社会に貢献していくつもりである。

さて旅立ちのときであるが、光風霽月の心境である。

最後に、お世話になった教職員方、共に切磋琢磨してきた友人たち、そして誰よりも私たちを見守り、応援してくれた家族に、感謝の言葉を送る。

都立高校教員としての三〇年余りの間、もう少し時間があれば、もっと十分な教材研究ができるのにと唇をかむ思いが募り、今までの考究や実践をまとめ、もう一度勉強し直すため、退職し（非常勤となり）大学院に入学した。文大には有職者のための長期履修制度があり、教員として現場での模索を続けながら、研究が可能である。私のテーマとする「『源氏物語』の教材化」は教材化提案の根幹で実際の多くの高校で実践可能かを見極める必要があり、できれば、現場を離れず研究を続けたいと思った。入学と長期履修が許可され、研究の環境が整った。文大の出身でない私は、不慣れなため質問が多く、ご迷惑だったと思うが、教務始め教職員の皆様には丁寧に対応していただき感謝にたえない。こうして、大学院と職場を往復する生活が始まったが、少人数の授業で、落ち着いて深く問題を追究し、専門以外の研究の現在を知ることができた加藤敦子先生、寺門先生の講義は現場の教員にとって自分の世界を広げるものとなった。さらに加藤浩司先生の演習で高校用文

法書を批判的に読み直すことで、研究と高校の文法指導の関係、本文や文献の解釈にどう文法を活かすかを一年かけて考えることができた。また、中世和歌の佐藤明浩先生の講義は、和歌が個人の思いを盛る器としてだけでなく、文化行事、天皇と周囲の貴族の紐帯としての機能も持つものであると再認識でき、従来持っていた和歌への苦手意識も減じた。

指導教官の長瀬先生には三年間の授業、研究指導で言葉には尽くせないほどのご指導をいただいた。教材化という特殊な研究テーマを受け入れてくださり、迷いの生じる度に適切な助言をいただいた。先行研究を重んじ、整理していくことを中心に据えること、問題を整理し鮮明な論点を立てることという教えは、修士という研究段階の要諦として肝に銘じることができた。今後の研究や後進への助言に役立てたいと思う。

牛山先生には、授業を受講する前から、草稿が完成する度見ていただき、丁寧なご指導と激励をいただいたことで、研究の方向性を見失わずに三年間を過ごすことができた。

三年間有難うございました。現場に戻り古典教育の充実に努力します。

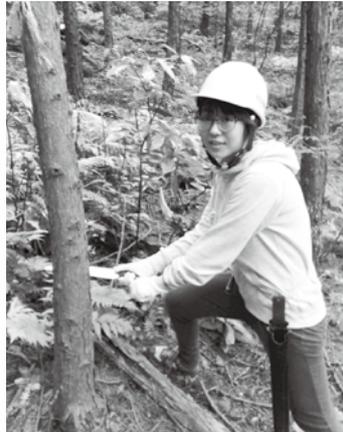
旅立つことば

宝物のような
留学生活

大学院
社会学地域社会研究専攻
霍 風霞

私は大学で、経営学の先生から日本経済や経営に関する知識を学びました。そして大学卒業後、普通のサラリーマン生活を送っているうちに、これは自分が本当に歩みたい人生ではないと気づきました。そこで、退職を決意し、経営者として、女性の友人と一緒に音楽教室を立ち上げました。それから間もなく、女性起業家に対する世間の厳しさを強く感じる事となり、また、経験や資金不足などが原因で、残念な結果に終わってしまいました。自分はまだまだ勉強不足だと感じ、日本への留学を決意しました。

日本語学院で一年半ぐらい勉強しましたが、日本語の上達がなかなか難しいと思いました。そのため、自信がなかった私はゼミで初めて発表したとき、緊張のあまり、うまく話せなくなってしまいました。そんな私ですが、先生方と研究室の先輩たちから励まして頂いたおかげで、徐々に日本語が上達し、だんだん大学院の生活に慣れてきました。大学院では、近代日本の経済、政治、文化、社会など様々な知識を学び、大学で学んだものをより理解した上



森林間伐のボランティア活動に参加した

で、数々新たな発見にも繋がりました。また、中島平和奨学金を取得したことで、自分の努力が認められたと嬉しく思いつつ、経済面の問題も解消できて、心から感謝しています。

勉強以外では、ボランティア活動に参加させて頂きました。せっかく農業が盛んで自然が豊かな都留市に住んでいるので、少しでも農業や自然の知識を身に着けたいと思ったため、田植えや春と秋に埼玉県森林の間伐にも積極的に参加しました。これらは、私にとって、大変貴重な経験だと思っています。

最後になりますが、修士論文を丁寧に指導して下さいました野畑真理子先生や日本語の文法を直して下さいました先生方、そして、ずっと私のことを支えて下さった友人と両親に、感謝の気持ちを申し上げます。都留文科大学での留学生活、私にとって、一生の宝物だと思っています。これからも、勇気をもって、強く生きたいと思っています。

夢が現実へ変わって
いく

大学院
英語英米文学専攻
棚田真理

幼い9歳の頃、私の夢は教師になることでした。しかし、時の流れとともにその夢を心の中のどこかに閉まってしまうしまいました。代わりに、キラキラ輝く歌手や、自分の世界観をたくさんの人と共有できる小説家などへの憧れのほうが強くなりました。

10年前、フィリピンから日本に初めて来たときは、文化と言語の壁を目の当たりにして友達を作ることが困難でした。高校に通い始めたときも最初の頃はほぼ孤立状態に至っていました。その時、私に優しく手を差し伸べてくれたのは、当時の英語の先生でした。先生は、他のクラスにいた私と相性が合いそうな人たちを紹介してくれました。それを契機に、自分の持っている明るい一面が同じクラスの人たちにも伝わり、自ら友達を作ることにもできるようになりました。この時、心の奥に潜んでいた夢がもう一回生き返りました。私もいつか誰かの支えになりたいと思いました。

高校卒業後の進路として、就職より大学進学を選んだ私は、幼い頃の夢を叶えるために勉強に励みました。日本語での教職科目の勉強は辛いこ

旅立つことば



指導教官と後輩との楽しい
Independent Studyの様子

ともあり、何度も諦めようと思いましたが、その度に今まで支えてくれた先生たちのことが頭に思い浮かびました。「報われない努力なんてない！諦めないで努力し続ければ、いつか必ず結果は出せる！」という、小学校の時にお世話になったある先生の言葉を自分に言い聞かせながら何とか頑張りました。

学部を卒業する時点で、知識と実践的な経験が不足していると感じ、大学院に進学しました。学部と異なり、院では学生数も多くなく、一緒に学ぶ皆と強い絆を築くことができました。授業でも教授から個別に指導を受けることができたため、学部の時よりもっと深く学ぶことができました。教授たちは、親身になって、ときには優しくときには厳しく、私のことを応援し、支えてくれました。残りわずか、私の学生生活も終わります。心溢れる感謝をお世話になった人たちに捧げ、4月から新たな道を、横浜市の教員として歩み始めます。

自己発見



大学院文学専攻科
臨床教育実践学専攻
謝 嬌

私は2013年に研究生として都留文科大学に入学し、一年半の研究生生活を送り、大学院に入学した。

私は大学時代に日本語を専攻し、文大に入ってから教育学を勉強し始めた。研究生の頃に、学部のゼミに参加して、自分のことについて語ることも多かった。自分の過去を語ることによって、自分自身を新たに発見する体験に驚きと新鮮さを感じた。

それがのちに修士論文のモチーフとなる、Narrative inquiry との最初の出会いだったのだ。自分の経験について考え、理解する。そして、一見、バラバラで、何の関係もない私の過去の経験に繋がりを持たせ、軽視していた過去のストーリーにナラティブ的探究の過程によって意味を与え、自分自身に対しての再発見も出来た。

私が繰り返し語ったことは次のようなものだった。

数学が苦手で、自分ができないから、数学に恐怖を抱いていると思っていた。しかし、自分の過去のストーリーと共に考えると、数学の授業で、先生に怒られ、立たされ、怒鳴られた経験が数学が苦手な私を形作っていると思ひ込んでいたが、「よい点数を取ってもらいたい」教師とそれに答えられない生徒という関係性によって、自分が傷ついているのだという再解釈を



田中ゼミの食事会のおわりに

得ることができた。そして、そのことは、今になっても、私の生活、および、未来への選択に影響を与えていることになる。

私は自己への再発見を通して、経験の関係性、社会性、連続性を重視している Narrative inquiry に魅了された。そこで大学院では『関係性を通じた子どもの「自己」発見のナラティブ的探究』をテーマにした。一年半近く、毎週のように私は小学校に訪れ、授業の見学、子どもたちとの関わりの中で、日本の学校文化を体験させていただいた上に、私自身が持っている中国の学校文化の特徴をより鮮明に思い知らされた。ここで、研究に協力してくれた A 小学校の先生及び、子どもたちに感謝を申し上げたい。このことも含めて、大学院での研究を通じて、知識や新しい考え方を学んだだけでなく、自分が持っている常識を問い直し、自己発見と新たな自己を形作る体験をしてきたことを実感する。

最後に、三年半近く、ずっと指導を受けている田中昌弥先生に深く感謝をいたします。田中先生や指導を受けた他の先生たち、そして、私の研究の参加者である A 小学校の先生方、子どもたちの教え、協力、期待に応えられるように、中国に帰っても勉学、研究に励み続け、子どもの教育に少しでも役に立つような人間になりたいと思う。

初等教育学科 平成28年度卒業論文題目

麻場 一徳ゼミ

- 荻野 啓子 ピッチの変化からみる200m走のレース分析
河崎 し乃 卓球における競技力と身体能力との関係
—一般的な大学卓球選手の場合—
桑原 美月 女子100mハードル走の記録向上における
—考察—都留文科大学陸上競技部M. Kの場合—
園田 可南子 短期間低酸素トレーニングの効果について
—陸上競技女子スプリント系選手K. Sの場合—
近本天晴生 サッカースキルと身体能力・体幹力との関係
寺田 皓希 総合型地域スポーツクラブに関する研究
—保護者からみた期待度と満足度—
長坂 宏紀 クリーンの挙上重量とコントロールテストの
各項目との相関関係
—都留文科大学陸上競技部男子の場合—
二宮 聡史 走幅跳の各局面に要した時間と速度が競技記
録に及ぼす影響—7m68cmまで記録を高めた
男子走幅跳選手の事例を手掛かりにして—
宮原 佑奈 パフォーマンス・ルーティンについて
—ソフトテニス競技におけるファースト
サーブに着目して—
森 佑紀那 ピッチとストライドからみる100m走の考察
—都留文科大学陸上競技部Y. Mのパフォー
マンスの変化から—
大村 陽香 立ち幅跳び踏切時の動作に関する研究

岡野 恵司ゼミ

- 坂井 佑衣 平坦折り紙の数学的性質と、折り紙を用いた
教育について
絹見 真史 オペレーションズリサーチ
—順位最小化問題—
許 鴻臣 等差数列の中の素数
岡崎 亨輔 「数学的な考え方」を育てる算数授業
近藤 孝俊 江戸時代における算乗和の考察
橋詰 友佳 結び目のはなし
真門 薫那 特別支援教育における算数指導案
宮下 健太 大学数学で読み解く相対性理論

春日 由香ゼミ

- 鈴木 亜依 小学校国語科入門期における言語発達の支援
—通級指導教室「ことばの教室」との関連—
瀧口 有紀 地域文集『すその』の研究
—文集を活用した「書くこと」の指導—
龍田 光司 小学校国語科教科書における平和教材と指導
法の研究—今西祐行『一つの花』を中心に—
前田 直也 小学校国語科教科書における学習基本語彙の研究

佐藤 隆ゼミ

- 松本 諒子 教師として成長するための条件と課題(坂田
和子実践の背景をもとに)
頼政 祥子 “開かれた学校”をつくるために
—自由の森学園の実践を通して—
須藤 裕香 学級の規模が教育に与えるものとは
池宮 千秋 沖縄における子ども期の貧困と学力
竹内 千春 スクールスタンダードと学級経営
—子どもと教師の自由とは—
橋本 真樹 学校教育における「ポートフォリオ評価法」
の可能性—自由の森学園の実践を通して—
大野 直樹 日本のインクルーシブ教育について
—教育史・国際比較・インタビューを通して—

早川 恵子ゼミ (筒井 潤子ゼミ)

- 有田 真也 子どもと先生の程よい距離感
—言葉による関係性—
伊藤 一恵 10代で母になること
—幼い「母」が望む支援と援助者としてでき
ること—
奥脇 莉子 子どもの居場所と表情
—不登校の子どもに焦点をおいて考える—
勝又まなみ 児童養護施設職員の抱える課題から考える支
援の在り方
工藤 百菜 学校が出来る最大限の支援とは
—どの子にも温かい居場所のある教室を目
指して—
小林美香子 障害のある子の学校生活と心
中野 里栄 出産後の子育てとその支援
—産後鬱病に焦点を当てて—
渡辺 樹里 学校で話せない子どもたちへ
—通常学級における場面緘黙児への理解と
支援—

清水 雅彦ゼミ

- 上田 明穂 キリスト教における宗教曲の原点とその影響
関根 歩 歌うということ
—一人は何故歌うのか—
久田 絢香 音楽教育のこれからについて
—歌唱教材の視点から考える—

十川 菜穂ゼミ

- 青山 澄乃 奄美の文化を受け継ぐために
笠井みなみ 音楽の表現の可能性
—音のイメージを追究する—
杉本 真奈 ショパンの生涯と音楽
—練習曲を中心に表現の本質を考察する—

高岡 真帆 シューベルトはなぜ歌曲を書いたのか
 竹岡 美帆 子どもたちが音楽から得るもの
 藤崎 優 夜想曲の変遷
 三浦 綾乃 印象主義音楽を読み解く
 ードピュッシー、ラヴェルの作風から—
 山岸 修子 ベートーヴェンの生涯とピアノソナタ
 —ピアノソナタ第21番ハ長調作品53「ワ
 ルトシュタイン」の考察—

添田 慶子ゼミ

山本 純花 姿勢についての意識調査と現状について
 —都留文科大学学生の場合—
 島中 航平 日本と中国の体育指導についての研究
 —学習指導要領に着目して—
 濱屋 崇 スポーツ競技者における球技種目の得意不得
 意
 三森 大河 小学生における生活習慣と体力の関係につ
 いて

平 和香子ゼミ

内田 千尋 大学生における食物アレルギーに関する意識
 調査
 木戸 静莉 小学校家庭科住居領域における環境教育との
 関連性
 佐々木新樹 教員養成系大学生を対象とした食育プロ
 グラムの検討～減塩指導を中心として～
 塩田 勇介 大学生におけるいじめ問題の現状
 杉原 藍子 大人絵本の世界に関する研究
 涌井 真幸 手指・足指の巧緻性に関する研究
 渡邊 夏歩 小学生における瘦身意識と自己肯定感との関
 連について～Eating Disorder Inventory
 を用いた検討～
 申 玄祉 保育園における給食指導と食育実践

高田 理孝ゼミ

橋田 笑美 自伝的記憶が人生満足度に及ぼす影響につ
 いて
 福崎 集太 対人認知による印象形成について
 竹内 佑理 自己愛傾向とリスクテイキング行動
 松土 早紀 後悔の時間的変化と対処方法
 仲宗根翔子 自伝的記憶について
 山口菜々子 ソーシャルスキルと自尊感情がレジリエ
 ンスに及ぼす影響
 中村 美美 友人関係における“キャラ”の受け止め方と
 心理的対応
 橋本 怜 友人関係における心理的距離のズレ
 沼館 由香 不注意と多動性・衝動性の自覚が大学生
 活の不適応感に与える影響
 布一 敏幸 失敗経験後の原因帰属と自己効力感の係
 関係性
 平澤 里奈 大学生の生活習慣と自尊感情の関
 係

高田 理孝ゼミ (市原 学ゼミ)

伊藤圭祐 片野美咲 佐々木勇太 土肥愛佳 山田悟史
 ADHD、双極性障害、および自尊感情の関

連
 池田真由子 加藤正敏 徳田大地 中尾友香
 共同体感覚と社会的行動の関連について
 大石 紗希 大学生における発達障害特性をもつ学生の大
 学生生活充実度とコーピング調査
 武岡航至 中川圭吾
 大学生の抱えるストレスの研究
 —ストレス反応とストレスラー、コーピング
 の関連について—
 田島恵利香 最上 葵 山下美智子
 大学生の恋愛における男性観・女性観の違い
 について

竹下 勝雄ゼミ

渡邊 皓 個性を育む児童画の指導に関する一考察
 田中 花穂 美術館における展示と鑑賞の関係性
 高木 瑤之 小一プロブレムへの対策
 —図画工作からのアプローチ—
 石原あすみ 鑑賞教育の意義について
 —児童に対する鑑賞教育について考える—
 三好 千瑛 「児童文化」と絵本の役割
 前平 瑞穂 色彩が持つ力とその役割
 廣本 順亞 図画工作における子どもの模倣
 小宮山景子 初等教育における図画工作の鑑賞の時間
 の必要性について

田中 昌弥ゼミ

栗澤 明弘 学級崩壊の予防策と再建策から考える安心な
 居場所づくり
 飯嶋 里帆 日本の子どもの貧困
 —社会の在り方と学校での支援を探る—
 宇津木香純 アクティブラーニングの課題を乗り越える
 —2つの実践から見える子ども理解の必要性—
 岡崎 千晶 学習意欲と学ぶ力を高める教育
 栗山 彩華 子どもを理解し理解される教師とは
 —阿部俊樹実践と渡辺恵津子実践の検討か
 ら—
 桑平 尚美 貧困と子ども
 —貧困の連鎖を断つために教育ができるこ
 と—
 佐坂 僚太 各教科の授業内における道徳教育
 細越真梨子 すべての子が活躍できる学級づくり
 —発達障害を抱える子どもたちのために—
 今泉 佳奈 新卒教員の学級づくりにおける楽しさと困難
 —理論書とインタビューから—

堤 英俊ゼミ

大塚みずほ 学校教育における子どもと教師の関係性の再
 構築—「書くこと」と「読むこと」のちから—
 且 知奈美 障がい者の就労支援とアールブリュット
 —福祉の現場から社会が変わる—
 佐々木真琴 ADHD児を有する児童のきょうだい支援
 —教師の目線から—
 内藤かんな いじめに向かう心の根っこを探る
 —「負の感情」を上手に抱え、向き合うため

- に—
 林 智子 現代家族における「愛する」ということ
 松永 智行 支援者は子どもの「言語表出」とどう向き合
 うか—ある寡黙な少年への支援実践から—
 山口美奈子 アートでつながる
 —誰もが「生きやすい」社会の実現を目指し
 て—
 逢坂 佳希 地域と学校が協働したキャリア教育

鶴田 清司ゼミ

- 青木 優奈 アクティブ・ラーニングにおける子どもたち
 の主体的・協働的な学びについて—日本とカ
 ナダの授業実践から—
 穴澤 麻那 非言語コミュニケーションをいかした教育方
 法
 荒井 旅人 板書が生む豊かな学び
 —黒板と電子黒板を比較する—
 井出明佳里 対話的な学びについて
 —学びを深めるために—
 菅原 光咲 例えを使うことで子どもを育てる
 —授業中での指導助言—
 高橋 瑞稀 「書く活動」における交流の意義
 —「読み合う」に注目して—
 増田佳那子 協同的な学び合いの意義と課題
 —自分自身の学習経験を踏まえて—

寺川 宏之ゼミ

- 中飯田真依 算数からみる初等数論
 安樂 成穂 和算～現代との解法の違い～
 井上 拓也 発達障害をもった子どものための算数教育に
 ついて
 内山 悟 算数的活動から表現力を育てる
 加藤紗恵子 黄金比について
 佐藤美那子 正多角形の描き方
 谷口 檜 オイラーによるパーゼル問題について
 村角あゆみ そろばん教育について考える
 山口富美江 数と計算における算数的活動について

鳥原 正敏ゼミ

- 小沼このみ 図画工作における試行錯誤についての一考察
 梶原 遥 図画工作における答えの追求と作品の背景に
 関する一考察
 加藤 萌香 図画工作の活動からみる子どものようす
 中村 正義 図画工作におけるインクルーシブな環境
 西野 喜人 心を育てる図画工作
 廣重進之介 図画工作からみる子どもの多面性と評価の可
 能性
 本橋 佳奈 図画工作で築く他者との繋がり
 山田 翠 小学校で育む表現—造形活動とことば—

中井 均 ゼミ

- 佐々木健二 城田優介
 地震防災教育（南海トラフ地震・首都直下型
 地震における対策の例）

- 地村 望 野口真衣
 常願寺川を題材とした防災教育について
 ～富山市・立山町～
 松尾亜耶 丸山詩織 丸山 純
 西表島及び竹富島の海岸砂の研究

西本 勝美ゼミ

- 漆原 聖人 格差社会と向き合うために
 —子どもの貧困から考える学校教育のあり
 かた—
 大河 聖宏 地域で学ぶ、地域を学ぶ
 —地域の「今」を子どもと育む—
 金子 達哉 個性が生きる学びとは
 —子どもの多様性を尊重すること—
 中田 匡彦 地域づくりの当事者を育む体験活動
 —地域の伝統文化を活かした初等教育実践
 を通して—
 水本 結菜 子どもも親も安心できる居場所づくり
 —理解し合う学童保育—
 森堪 太郎 少子化時代の学校づくり
 —小規模校と地域の構図から—
 渡辺 翔香 子どもの力を捉え直す
 —震災と向き合う教育実践から考える—
 渡邊 智大 点数評価を超えた教育
 —自由な教育環境で学びは成り立つのか—
 木呂子拓海 学校の食農教育を問い直す
 —子どもの心を五感で動かす—

平野 耕一ゼミ

- 北川大智 小泉允人
 紙飛行機の工学的研究と児童に紙飛行機の
 原理を理解してもらうための教材づくりに
 ついて
 小沢雅奈子 森 夢菜
 子どもたちが実感を持って次代の安全意識
 を持てる防災・環境教育
 湯浅光芳 佐藤翔平
 理科離れの現状と、可視化教材を用いた電気
 分野における理解の向上について

藤本 恵ゼミ

- 新井 友子 あまんきみこ作品の〈教材価値〉
 大橋 龍 恩田陸作品における〈移動〉
 —『蛇行する川のほとり』『夜のピクニック』
 『ドミノ』を中心に—
 小田 隆拓 村上春樹の多声性と単声性
 —『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼
 の年』を中心に—
 黒岩 彩音 安部公房作品における《自由》と共同体
 —〈失踪〉と〈顔〉の描かれ方を中心に—
 財津 雅人 畠中恵「しゃばけ」論
 —〈ジレンマ〉の物語—
 田村 悠太 小学校第五学年、第六学年の詩の授業
 —東京書籍の国語科教科書を中心に—
 内藤 大輝 太宰治作品における〈時間〉価値

中平 敬子 小学校中学年の「朝の読書」を考える
 中村 美琴 湊かなえ作品の描く〈母性〉
 山口 薫 宮沢賢治童話の世界観
 —『双子の星』と『銀河鉄道の夜』を中心に—
 與五沢遥可 工藤直子『のはらうた』の世界

別宮 有紀子ゼミ

上田 理裕 ミヤマハンノキは緑の葉を落とす
 —富士山五合目における生態系の物質循環
 に与える影響—
 鈴木 将公 カジカが戻ってくる川を目指してⅦ
 —大幡川におけるカジカの生息状況と水質
 との関係—
 小澤 聖巳 ハクピシンの分解過程の観察
 —自然の中の循環と命に関する教育への応
 用—
 李 艶如 モミ材とエゾマツ材の黄変原因と効率的な除
 去、防止法—木材授与品の利用率を上げ、木
 材伐採量を減らすために—
 大脇菜優 丸山結生
 訪花昆虫の種類や数が花によって異なるの
 はなぜだろうか
 —蜜量、蜜濃度、花形に着目して—
 松島 瞳 八瀬尾麻美
 身近な生きものから始める環境教育
 —カワラナデシコ里親活動の実践を生かし
 た教材研究—

柳 宏ゼミ

山川 緑 歩行能力と運動能力との関係性
 色摩 理恵 本学学生のスポーツ経験が社会的スキル形成
 に及ぼす影響についての研究
 —2011年と比較して—

清永いより 子どものスポーツ活動に対する保護者支援の
 意識調査研究
 —高校女子バレーボールの場合—
 宮里 晴香 バスケットボールのシュートパフォーマンス
 とルーティンの関係について
 —フリースローに着目して—
 細野 ちか バレーボール競技におけるサーブ効果率と
 ルーティンの関係—実際のゲームにおいて—
 松尾奈津子 バレーボール競技のセッターパフォーマンス
 に関わる重要な要素に関する研究
 —競技レベルの比較—
 春日 咲乃 バレーボールゲームにおけるスパイク評価の
 研究—関東大学女子2部の場合—
 望月開史 横澤修作
 オリンピックの歴史的考察
 —経営資源の観点から—

山森 美穂ゼミ

辻万 里奈 模擬室内実験を生かした環境教育
 大谷 健太 小学校教員志望学生の理科実験における安全
 意識をどう高めるか
 伊藤 拓也 小学校理科教育で食品添加物を取り扱う手立
 ての検討
 柘植大在門 川への関心を高める活動を通じた小学校環境
 教育
 吉岡 沙代 役立つ実感を得る化学実験
 —防災グッズのしくみの探求を通じて—
 有川 優大 NIE (Newspaper in Education) を取り入
 れた小学校理科教育
 小野 敏幸 『四次元デジタル地球儀』などの ICT を活用
 した実感を伴う小学校『地球』分野の学習

国文学科 平成28年度卒業論文題目

上代文学 鈴木 武晴ゼミ

- 天野 美貴 神話の鳥—八咫鳥をめぐって—
 岩崎 亜美 『古事記』の神—死生観をめぐって—
 上田 麻由 上代文学における「ひめ」
 奥山愛祐美 神話と月—月読命と夜之食国—
 小澤 由樹 万葉集の七夕歌
 小沢 里帆 『古事記』に見る人々の思想
 小林 秀 蛇信仰の源流と八岐大蛇退治の考察
 椎木 紗希 万葉集の歌と色彩
 塚原 瑞穂 五穀の起源の神話
 長谷川豊輝 風土記の浦島伝説の女性呼称と文学性
 藤本 梨菜 上代の月の文化と文学
 宮川 和穂 上代文学の「もり」から見る「山」
 森本理沙子 上代文学の鏡
 山内 悠衣 『古事記』における女性たち
 吉井 康容 月—上代と現代—
 石井 二葉 神話の世界観—葦原中国を中心に—

中古文学 長瀬 由美ゼミ

- 阿部 亮太 『源氏物語』の贈答歌をめぐる問題
 金澤 真美 『三宝絵』における女人往生
 前田 美咲 『源氏物語』における結婚拒否

中世文学 佐藤 明浩ゼミ

- 伊藤 佳菜 『百人一首』の秀歌撰としての性格
 境 津々美 平家物語における服飾と人物描写
 高木 天太 中世における小町像と小町伝説
 土幸 真衣 八代集における「川」について
 中里 真琴 『玉藻草子』と民話「殺生石」の比較
 中山 瑞希 凡河内躬恒の和歌表現
 名古 優香 延慶本『平家物語』の構想における熊野—小松家とのかかわりを中心に—
 細川 葵 「有明の月」と「雪の曙」
 —『とはずがたり』—
 森田真佑希 夢の詠歌における身体感覚表現
 —『新古今和歌集』を中心に—

近世文学 加藤 敦子ゼミ

- 岩間 雄星 『本朝三国志』における近松門左衛門の武士像
 岡 美沙子 近世文学における人魚表象
 小俣なつみ 『桜姫全伝曙草紙』における清玄の執着と悲劇
 高橋 奈央 合巻における玉藻前
 滝澤 亮 俳人月居の研究
 永井 与子 『春告鳥』における女性
 西 智哉 お夏清十郎物の解体について

- 林 三鈴 『江戸生艶気樺焼』に見る「色男」の形成
 山本 里穂 『心中二つ腹帯』『心中宵庚申』の表現
 坂本 碧 『丹波与作待夜の小屋節』と歌謡

近代文学 古川 裕佳ゼミ

- 小田部友香 森茉莉「恋人たちの森」論
 佐藤 優希 室生犀星『津の国人』論
 佐野ひとみ 吉本ばなな「白河夜船」論

近代文学 野口 哲也ゼミ

- 村越 里美 川端康成「雪国」論
 瀬野 拓真 有島武郎『一房の葡萄』論
 —許すということについて—
 伊藤 大樹 宮沢賢治における民話的素材の昇華—「ざしき童子（ぼっこ）のはなし」を中心に—
 岩本 春香 内田百閒『冥途』
 —『冥途』の現実と非現実の境界線—
 大越由姫奈 江戸川乱歩『押絵と旅する男』論
 —奇妙な空間とモチーフ—
 長田由香里 武者小路実篤『棘まで美し』論
 —愛と仕事が彩る幸福について—
 久保奈都美 梶井基次郎『冬の蠅』論—生と死の闘争—
 粉川 新哉 安部公房『R62号の発明』論
 —機械の心は存在するか—
 篠田 春菜 芥川龍之介「地獄変」論—良秀の狂気と愛—
 鈴木 明里 芥川龍之介『河童』にみる「デグウ」の影
 秘められた思い
 高田 慶伍 武者小路実篤『友情』論
 —手紙から見る理想と愛—
 滝沢 里菜 連鎖する死—夏目漱石『こころ』における淋しさを中心として—
 玉川 真帆 佐藤春夫「西班牙犬の家」論
 —夢見心地の表象—
 廣瀬 英恵 中島敦「山月記」論
 —ことばの役割と登場人物—
 藤本ことの 稲垣足穂『星を売る店』—天体と自己の存在—

近代文学 田口 麻奈ゼミ

- 伊藤 菜美 上橋菜穂子『精霊の守り人』論
 金谷 優奈 村上春樹「めくらやなぎと、眠る女」：不可視な痛みと治癒される僕
 熊谷 真綾 萩原朔太郎『猫町』論
 小島 花野 梶井基次郎『檸檬』における感覚表現
 —「芸術」の完成を目指して—
 嶋田 愛也 梨木果歩『西の魔女が死んだ』論
 瀧口 皓太 森見登美彦『四畳半神話大系』論
 田中 麻子 中原中也『秋』論
 野口 恵里 辻村深月『凍りのくじら』論

宮野衣里子 一葉の子どもたち—思いの丈をくらべて—
渡邊奈都美 俵万智『サラダ記念日』論
嘉本早紀子 夏目漱石『吾輩は猫である』論

近代文学 新保 祐司ゼミ

宮地 眞子 新美南吉と狐の登場する物語
市川ななみ 新聞と近代文学の関係
佐久川大旅 沖縄文学について—一目取真俊を中心に—
長池 摩耶 江戸川乱歩と歪んだ世界—一人間椅子について—
福島 可琳 近代文学者たちと書
宮田 菜帆 夏目漱石の死生観
田渡 夏菜 文学に見る家族の定義

古代語 加藤 浩司ゼミ

海老名ゆき乃 鳥の鳴き声の聞きなしについて
馬居 知代 感動詞「あら」について
浦野 有李 怒りを表す動詞について
—イカル・オコル・ハラタツ—
酒井 彩華 形容詞的接尾語「ガタイ」「ニクイ」「ゾライ」
について

近代語 鈴木 芳明ゼミ

安仁屋圭乃 新ウチナーヤマトグチ
石井 里実 転成名詞の意味・用法
市原 杏奈 食品名およびキャッチコピーに見られるオノ
マトベ
伊原 美玖 若者言葉としての「普通に」「地味に」
大川さつき 色彩語とともに連想される言葉の関係性
太田健太郎 夏目漱石の当て字と現代の当て字
北山 果歩 若者雑誌における非標準的カタカナ表記語の
一般化
小林ゆかり 接続助詞的な「のが」
坂上 優太 国学者の仮名もじ遣い—「す」を中心に—
杉浦 有美 談話におけるフィラーの出現傾向と機能
鈴木 優花 漢語接尾辞「系」の成立と展開
中谷 眞子 英文和訳から考察する助詞「が」と「は」の
意味・機能について

漢文学 寺門日出男ゼミ

加納 和陽 司馬光の歴史観
陶山 詩織 『三国志演義』における女性像
高橋 広大 六朝志怪小説の動物報恩譚について
竹内 結希 唐代自然詩における鳥について
千田あかり 『文選』所収の西晋詩について
寺田奈々美 『搜神記』説話の展開について
原 優唯 太宰春臺の孝観
三森帆乃佳 蘇軾の茶詩について
脇田 夢子 荻生徂徠『孫子國字解』について

国語教育学 野中 潤ゼミ

浅野 恵理 詩歌創作の学習指導
—豊かな言語感覚の育成のために—
一川 有希 コミュニケーション能力をあげるために国語
教育でできること
今井亜沙弥 読書嫌いな子供を減らすために
—絵本学習の可能性—
岩邊 茉実 作文指導による子供の書く力の育成
鶴飼な々美 これからの中学国語科教育
—一次期学習指導要領改訂に向けて—
角地山春奈 国語科教材における生と死
川原 幸 橋本武の教育実践研究
—現代国語教育への応用—
小谷 悠馬 クローズド型 SNS と国語教育
沢田侑里亜 灰谷健次郎作品における教師像
花城日向子 沖縄県における国語教育について
原田 奈苗 スポーツ児童文学の教材性
平塚 美穂 防災安全教育と国語科の学習
松本 悠司 国語科教育におけるメディア活用について
松本 純枝 日本教育のこれから—高校国語教育における
アクティブ・ラーニング—

日本文化 菊池 有希ゼミ

大澤 遼太 「安部公房のカフカ論から見る『他人の顔』
中田 勝也 和辻哲郎『風土』における「旅行者」の視点
足立 薫美 キリスト教的視点から読み解く三浦綾子氷点
論—韓国受容を視野に入れて—
小川 陽明 有島武郎『小さき者へ』におけるメッセージ
—社会主義と〈愛〉の考察から—
表 沙央里 川端康成『掌の小説』と映画『掌の小説』の
比較
小松 舞花 「川端康成と〈手〉—『片腕』を中心に—
高田 美聡 安岡章太郎作品における“父”
—「海辺の光景」「家族団欒図」「ソウタと犬
と」を中心に—
鶴野 翔斗 中島敦『古譚』論
—「獲得」と「喪失」の観点から—
永田 将也 「宮沢賢治作品における産業組合表象
—『ポラーノの広場』、「産業組合青年会」、
「こっちの顔と」を中心に—
平賀 愛 「主題(テーマ)小説家」芥川龍之介による「桃
太郎噺」
米澤 静香 坂口安吾の孤独について
—『桜の森の満開の下』を中心に—

英文学科 平成28年度卒業論文題目

大平 栄子／白須 康子ゼミ

- 大西 琴絵 *Sex and the City* から考える女性の生き方
—結婚という選択肢—
- 白波瀬美咲 「女子力」の捉え方に関する日米比較研究
—*The Devil Wears Prada*—
- 伊藤 美来 *I AM MALALA* ～パキスタンにおける女性差別、女性教育の現実～
- 内田 仁菜 Q & A から見るインドの現実社会
—児童労働の真実—
- 大田 真澄 *Jane Eyre* にみえるフェミニズム
- 小林 夏希 *I AM MALALA* に見る途上国の教育事情
- 酒井菜津子 南アジアにおける性差別をいかに乗り越えるか—ムフタル・マールとプーラン・デヴィー—
- 中嶋 梓 *When Marnie Was There* における少女の成長の過程
- 望月 里菜 *The Color Purple* に見る二重差別から自由を手に入れた女性像
- 山城安紀子 *Pride and Prejudice* からみる時代思想と女性の社会的立場
- 山田 佳奈 *Myself Mona Ahmed* におけるモナの Myself とは
- 山本ゆう子 女性雑誌の変容と女性への影響
- 吉田 志帆 *3 idiots* にみるインドの教育問題～若者が自殺に至る背景～

加藤めぐみゼミ

- 石井 萌絵 ダニー・ボイル演出 *Frankenstein* における怪物の欲望
- 石田ゆうな 『指輪物語』における神話体系の構築
- 井出亜里紗 『日の名残り』にみるカズオ・イシグロのアイデンティティ
—日英の使用人を比較して—
- 大崎 里奈 *Never Let Me Go* におけるクローンと人権について
- 大野友梨香 C.S.Lewis の世界—神話・キリスト教からみる *The Chronicles of Narnia*—
- 澤田 涼香 ロアルド・ダールの愛されるブラックユーモア
- 城田 理香 男女のためのフェミニズム—ウルフ、マララ、エマ・ワトソンをつなぐもの—
- 高橋 有香 『夏の夜の夢』におけるバックが繋ぐ2つの世界
- 西丸 和輝 *Emma* におけるお騒がせヒロインの魅力について

竹島 達也ゼミ

- 花川 もえ *M.Butterfly* にみるオリエンタリズム
- 関口 千穂 Sam Shepard 家族劇三部作 背景とイメージの世界
- 浅利 遥香 Ruined から見る発展途上国の紛争と課題
—Conflicts and Problems in Developing Countries which can be seen through Ruined—
- 小野寺 建 内と外から見るホモフォビア
—*The Laramie Project & Corpus Christi*—
- 七野 好世 現代アメリカを生きるイスラム系アメリカ人のアイデンティティ
—アヤド・アクタールの作品群から迫る—
- 田中 玲子 *Disgraced* に描かれるイスラム教徒の苦悩
- 千田 陽介 20世紀アメリカ演劇から見るヒトと文明の矛盾—*The Adding Machine* と *Death of a Salesman* と Y2K からの考察—
- 中村理華子 *Disgraced* に見るイスラム系アメリカ人のアイデンティティ
- 三沢 真弥 *Ma Rainey's Black Bottom* と *Seven Guitars* から考察する登場人物のブルースにおける価値観の違いと共通点
- 山村 佳那 THE HEIDI CHRONICLES から見る新しい女性像の誕生

儀部 直樹ゼミ

- 小林 裕子 ロック・ミュージックの始まり
- 白井 誉也 日本の英語教育を考える
—各国の英語教育と比較して—
- 大本なつみ アメリカにおけるチップサービスの変遷と今後の展望
- 岸野 成寿 海外における日本食レストランの受容と今後の展望
- 小林 堯 中学校教育現場での All English
～達成のための準備、有益性、各国との比較、そして限界～
- 佐々木紫花 スペイン関連作品について
- 鈴木 周平 児童文学の比較
—戦前～戦時中の日本とアメリカ—
- 高柳 大輝 時代を跨ぐもの—米作家間における類似と相違— “楽しむ読み方” を追求しながら
- 平美 一毅 芸術に死を (DEATH 2 THE ART) (自作の短編集)
- 深沢 圭 英語教育における音読の重要性について

山西 治男ゼミ

- 天野 雅彩 『グローリー・ロード』から考えるアメリカの人種差別問題とバスケットボール
- 石神明日佳 ディズニー映画 “Peter Pan” における Peter Pan

石川 瑠花	と Never Land の世界 時代の変化からみるディズニープリンセスの 変容
大竹 耕太	『インビクタス 負けざる者たち』から見る アパルトヘイトとネルソン・マンデラ
内藤 樹里	アニメ「トムとジェリー」からみるアメリカ 社会
平出 彩香	海外旅行を楽しむ英語
細井 一成	これから求められる英語教師 —その資質と能力—
松田 未来	吸血鬼について
横山 啓	『PEANUTS』から読み取る作者 Charles M. Schulz の人生観
吉村 朋也	早期英語教育の今後のあり方について

鷺 直仁ゼミ

吉田 夏実	ギリシャ神話と絵画
脇田 雅文	モネと時代における作風の変化
青木沙也香	ラファエル前派と女性たち —名画に生きるエリザベス・シダルー—
青柳奈々美	子どもを見つめて —時代の中で変化する子ども観—
荒城 奈那	西洋美術における裸体画
遠藤アイビー	ポッティチェリ《春（プリマヴェェーラ）》か らみる絵画と神話についての研究
河野 怜奈	イギリスにおける食文化の在り方
木下 侑香	紳士の国—イギリスの王室—
柴田 侑佳	女性と絵画
前田 朱里	フェルメールと 17 世紀オランダ
宮嶋 柚季	Hogarth と 18 世紀イギリス
村田みずき	後期ラファエル前派と彼らに影響を与えた女 性
渡辺芽莉穂	西洋絵画からみる人々の生活、時代背景 —激動の 19 世紀—

中地 幸ゼミ

中村 安那	『赤毛のアン』における主人公の分析と女性 像
深沢 優	The Conflict of Living as a "NO-NO BOY"
相澤 李沙	パン・アフリカニズムにおける Dubois と Garvey の思想
奥村 優貴	Dior からファストファッションへ
柿野 智大	<i>The Sun Also Rises</i> と Lost Generation
豊川 翔大	黒人差別に立ち向かったジャズミュージシャン
林 佑紀	E.L.Konigsburg 作品における子供の成長につ いて
吉田 慎悟	『失われた祖国』の沈黙から見るカナダの白 人至上主義
吉村 夏海	Shirley Geok-LinLim の <i>JOSS and GOLD</i> につ いて

今井 隆ゼミ

佐々木研人	The Influence of Dialects for Second Language Acquisition
-------	--

昌山 雅史	Difference between Human Language and Animal and Bird Communication: A Biolinguistic Perspective
森田 真登	On the Complements of Verbs of Ordering / Commanding in the History of English
山本祐太郎	The Difference of Onomatopoeia between English and Japanese

福島佐江子ゼミ

大勝ありさ	ポライトネスとソーシャル・モラルティー
金子 彩音	ポライトネス・ストラテジー：2016 年アメ リカ大統領選ディベートの分析を中心に
伊藤 涼哉	語用論的能力の重要性 —語用論的誤りを回避するために—
神谷 拓郎	「おもてなし」の語用論的一考察
亀井亜理紗	A Pragmatic Analysis of Interruption: With a special Emphasis on Gender
新部 史歩	日本人学習者によるほめへの返答
長江 真愛	若者言葉とポライトネス
三浦 志織	ポライトネス・ストラテジーの分析 —フェイスとラポールに焦点を当てて—

西出 公之ゼミ

西尾 貴成	スモールトークに見る英米間の相違
伊藤 麻衣	英語史入門書の手引き
佐藤 純実	早期英語教育におけるアクティビティの活用 法
原田 葵	語彙学習の必要性と方法

三浦 幸子ゼミ

森 美咲希	Analyzing a teacher use of follow-up and its effect in junior high school instruction
雨宮 良之	Exploring listening activities for young learners
葛西 梨乃	Analyzing listening tasks in junior high school textbooks
木田 裕成	Applying focus on form to EFL classroom: Focusing on input flooding technique
牧田 剛	An analysis of vocabulary presented in English textbooks for junior high school students
山内 美里	Exploring reading strategy:Text-based instruction in L2 classroom
小林明日香	Analyzing oral corrective feedback in junior high school instruction: A case study
高橋 風香	Applying cognitive linguistics to teaching vocabulary

奥脇奈津美ゼミ

髪口 愛良	The Use of Strategies in ESL Learning —The Problems and Prospects Suggested by the Results of Questionnaires—
内田美智子	Lexical Phrases and Fluent Language Production
高坂 雄大	Attention and Retention of Memory
佐久間悠希	The Similarities and Differences between Human and Primate Language
佐藤琳太郎	What is crucial to attract audience in the presentations?
清水 愛香	日本人のカタカナ語に対する意識と使用にお

ける意味の理解度について
藤田 有美 The Relation Between Musical Ability and Proficiency
Level of Second Language
堀井 彩瑛 第二言語の単語認知に関わる要因について

Hamish Gillies ゼミ

高橋 慧 The Motivational Effects of Study Abroad Experiences:
The Case of Students Studying Chinese in Taiwan
久保田大誠 英語を学習する学生の目的とは
井上 健瑠 The Use of ALTs in the Japanese EFL Context:
Problems and Suggestions for Change
植田豊デンゼル
Facts of Bilingual Biracial Individuals Living in
Japan and How They Establish Their Identity
海老原未佳 Use of L1 in the English language classroom :The

case of Japanese trainee teachers
大森 麻耶 What makes a good learning environment of
selected campus and museum for the students
and visitors?(Especially, in terms of efficiency)
榊原 秀政 The study of effective motivation in learning 2nd
language through the survey of Tsuru University
students
西森 遥 The Societal Functionality of Subculture
藤田 紗英 Multicultural Library Services: Comparing Japan
and Britain
星川 七恵 To make equal society: systems for LGBTs in Japan
and suggestions for improvement
山中 沙綾 The Definition of Japanese Identity
若尾奈津美 How has the role of the coffee shop changed in
Japan and how does this development compare
with coffee culture in UK.

社会学科 平成28年度卒業論文題目

現代社会専攻

現代史 菊池 信輝ゼミ

仙波 尚樹 階層社会と教育格差
田淵祥太郎 吉田茂論評価の変遷と戦後レジームからの脱却の関係
初山 千紗 福祉理念と社会保障
—福岡県における生活保護の実態—
本山 滉樹 日本の長期停滞と構造問題
神長 真志 1930年代の国民像
古川 夏希 太平洋戦争において歴史修正主義者がもつ論理構成について
田中 大樹 日本の産業革命の革命性
内山 歩 都市農村交流および移住志向の高まりからみる農山村の現代的価値認識について
大川原 茜 明治維新と音楽の近代化
木村 翔一 震災時行政対応の課題と解決に向けて
日下部知真理 戸籍法から概観する日本国民像と外国人の権利
近藤 匠 岸信介の大衆社会像
—社会保障・安全保障政策を手がかりに—
桜沢 莉枝 日本における世界史教育の歴史と展望
清野 直弥 東日本大震災と日本のレジリエンス
鈴木 直也 戦後民主化と国民意識の変化

地方自治論 安達 智則ゼミ

佐藤 博也 50年後 大月市が存続するためには～少子化・自治体構造改革・国際比較から考える～
牛山 涼太 地方金融機関の財源参入による地域再発展論
宮下 恵有 欧州先進スポーツに学ぶ地域密着スポーツの

可能性～ヴァンフォーレ甲府の実態調査を通して～

内藤 賢也 所得格差は正による子どもの学習能力向上へのパラダイム転換
望月 美沙 子育てに向き合う社会の実現
中島 華月 山形県における歴史的格差問題と最上地域文化～山形・東北からみた全国総合開発計画～
柴田 彩乃 社会的状態進化を目指したまちづくり研究～井上ひさしが目指した吉里吉里国より～
佐藤 駿平 地方自治体と社会的企業の協働による地域経営～福島再生ビジョン～
熊木 夕佳 クルマ社会からの転換で「歩く」公共交通中心の社会創造
～交通権保障の上越市交通政策樹立～
小川 蛍花 新自由主義克服のベーシックインカムの可能性
篠原 慎弥 『社会保障 2018年問題と自治体政策の役割—佐久地域の医療と介護のケアシステム—
「食文化」の多面的分析による「食」の新しい社会政策』
宮内 直哉 ダイバーシティ社会における観光発展新戦略
自治体立地論から創り出す自治体産業政策
～昭和町をケーススタディにおいて～
植松 優奈
菅原由希奈

現代政治論 進藤 兵ゼミ

青木 亮輔 日本の大学の進学率についての考察
天倉 香奈 東京都における住宅政策課題と空き家活用に向けての考察
石飛 美佳 阿波藍から見る伝統的地場産業産地の取り組みとその展望
後藤 克哉 「静岡県静岡市における人口減少対策の検討と課題」

叢 瑩 ソーシャルメディアが中国の大学生の購買意
向に与える影響—「新浪微博」を事例に—
樋屋 真 「財界」が政策決定に与える影響
手塚 麻美 今後の日本の難民政策について
—欧州の難民政策をふまえて—
古村 航 「労働基準法改正案の政策分析」
源 春風 日本のテレビドラマにおけるジェンダーイ
メージの変容
—テレビドラマの中の LGBT s—
森山奈津子 地域おこし協力隊の有効的活用に関する一考
察—島根県大田市の事例調査—

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

佐藤 溪 イスラム世界の現状と課題
今井 寛子 アイドルと現代社会—日本でアイドル文化が
受け入れられる背景—
曾我 周平 アクティブ・ラーニングについての—考察
新山 智子 「貧困と教育支援」
淵本 哲史 科学哲学と反科学
依田 裕 同調圧力からの自由
須藤 柚香 ルソー『エミール』における自己愛について
の考察

企業経営・労働とジェンダー 野畑真理子ゼミ

李 艶 「中国における大学生の就職問題」
金 凡植 「韓国社会における若者の労働問題」

環境法 小島 恵ゼミ

雨宮 早紀 再生可能エネルギーと地域振興
—小水力を中心に—
早瀬 将也 「日本のベストエネルギーミックス」
西田 環 農村における景観まちづくり
浅沼 勇希 社会的企業
—ソーシャルビジネスで社会を変える—
宮崎 綾音 地域環境ビジネスの創出
大内 沙都 地域課題を地域の資源とする
—獣害対策を地域活性化に繋げる—
島田 健太 日本における一般廃棄物問題の現状と課題

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

千葉明日佳 3.11と特別支援教育
石原 圭祐 インクルーシブ教育における障害児への配慮
伊藤 結稀 LGBT教育の現状と課題—NPO 法人与教育
行政による取り組みの検討から—
桑原裕太郎 ゆとり世代から見る「ゆとり」の全容
川原 聖矢 民間教育産業における教育の意味
—公教育との比較から—
富永 瑠香 スイミングスクールにおける子どもたちの学
び
高野 翔太 学習としての新人研修の意義
—新入社員に対するインタビュー調査から—
竹内 愛夢 生涯学習社会における奨学金制度の現状と課
題
高木陽一朗 社会教育の視点から見る水族館が生き残るた

めの方法
守田 裕美 日本における電子図書館の現状と課題
落合 尚斗 過疎地域における生涯学習を通じた地域活性
化
大石 卓弥 地域社会と連携する授業づくりの実践分析
町田 梢 子どもの貧困に対する地域の取り組み
—静岡県「みんなのみしま 子ども食堂」に
着目して—

日本経済論 堀内 健一ゼミ

杉山 貴哉 日本の雇用と格差問題
—貧困を生まないための制度と政策の検討—
高山 裕哉 「日本における所得格差の拡大と今後の課題
—マルクスの経済理論からの考察—」
武井 慎吾 貿易面から見た日本の経済の現状と今後の展
望—サービス貿易とコンテンツ産業を中心
として—
玉井 友章 ゆるキャラと地方活性
—ゆるキャラのこれから—
玉澤 暁典 日本の社会保障制度について
—財政的・制度的な限界—
深澤 晟那 「日本の製造業分野における中小企業の問題
点—国内需要の低下と資金不足について—」
丸山周太郎 日本のリーディング産業の実態と展望 「自
動車産業から捉える」
三石 賢 「ふるさと納税から見える地方財政の現状と
課題—ふるさと納税の導入の背景、地方交付
税との比較等を手がかりにした考察—」

憲法 横田 カゼミ

入江 真友 沖縄基地問題
岩田 寅彦 教育の中立について
岡本 周治 母子世帯から子どもの貧困について考える
—今求められる支援とは—
郡司あゆみ 「憲法と社会福祉」
高橋 優美 生活保護から考える日本の社会保障
—最後のセーフティネット—
塚本彩友美 「福島原発事故発生から現在に至るまでの被
災者支援の問題点」
野村 香織 貧困家庭における教育課題
濱野 健 憲法と労働法
森岡 秀介 「NHK 番組とメディアの内部的自由」

環境・コミュニティ創造専攻

環境教育 高田 研ゼミ

新妻 直人 「在来作物が果たす地域社会における役割」
—都留市十日市場地区の水かけ菜の事例か
ら—
石川 湊 —富士山麓周辺のゴルフ場と環境—
岩生 直也 百貨店の現状と今後の在り方
—J. フロントリテイリングを事例に—
上田 雅大 山中湖の今後あるべき姿とは

- ブラックバス問題を事例に—
 柏倉 朋実 完結型林業の現状と課題 岐阜県中津川市
 加子母と岩手県気仙郡住田町の事例から
 片山 綾日 エコツーリズムの現状と課題
 —「地域」の視点と「旅行業」の視点から—
 加藤 結花 子ども食堂の可能性
 田口 冬来 災害避難生活の実態と課題
 —熊本地震、嘉島町の事例から—
 中村 和敬 Honda の CSR について
 —社会貢献活動や環境保全等の環境教育、ハ
 ローウッズとのかかわりの視点から—
 西岡 啓太 学校教育における飼育小屋
 —静岡県富士宮市を事例に—
 西川 静流 地域で子どもを育てるためには
 —岐阜県中津川市加子母を事例として—
 舟久保憲杜 商店街活性化の取り組みの課題と提案
 —山梨県富士吉田市の下吉田の商店街と甲
 斐絹を事例に—
 三木 駿太 戦場ジャーナリスト山本美香
 —生前と死後の報道の違い—
 山脇 知樹 企業と環境教育
 —TOYOTA と林業を事例として—

地域経済論 両角 政彦ゼミ

- 入倉 陽子 山梨県山梨市「空き家バンク制度」の活用と
 地域への影響
 柴田 広一 大学と地域の教育機関の連携による相乗効果
 と課題—国際教養大学と大仙市立東大曲小
 学校との連携を例に—
 田村 快 木質資源活用による地域活性化—「バイオマ
 スタウン真庭」の取り組みを例に—
 野元 大 Jリーグクラブの多面的事業展開における地
 域貢献活動とその意義
 —ヴァンフォーレ甲府を事例に—
 東岡 宏樹 公教育再生へ向けた取り組みとその可能性
 —静岡県西伊豆町と株式会社Z会の連携を
 事例に—
 古野 晶紀 農業における障がい者雇用の取り組みの現状
 と課題—静岡県浜松市を事例に—
 三好 雄大 地産地消による地域活性化の現状と課題
 —北杜市と大月市の比較考察—

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

- 石原 光哉 「森林ボランティアへの継続的な参加要因に
 関する考察」
 大山 哲平 農林業公社が農地の維持・存続に果たす役割
 —長野県下伊那郡天龍村を事例にして—
 加藤 咲季 新潟市黒埼地区における枝豆栽培の定着要因
 武田 美月 伝統野菜の可能性
 —長野県上伊那地域「白毛もち米」を例に—
 長友 航 道の駅へのかかわりを通じた農家の生きがい
 づくりの可能性
 —山梨県南都留郡道志村の事例—
 舟田 早帆 地域の伝統野菜が持つ農業的価値の再発見
 —山梨県都留市の水掛菜栽培を事例にして—

環境社会学 平林 祐子ゼミ

- 安宅大史朗 ごみ分別アプリの研究
 石丸なつみ 「シカ=獣害」から「シカ=資源」へ
 —都留近郊におけるシカの資源利用拡大に
 むけて—
 宇佐美真悟 「福島原発事故から山梨県へ避難してきた人
 に対する支援政策の実態と課題」
 大桃 悠哉 「魚沼ブランド」を利用した地域振興につ
 いての考察
 岡村 論 地域密着型クラブと目指す地方創生
 —松本山雅の地域貢献活動とその成果—
 曾根 太佑 「福島原発事故による避難者の人間関係の形
 成条件」—山梨県内避難者の調査をもとに—
 水森 広美 太陽光発電が環境に与える影響
 —山梨県北杜市太陽光発電を例にして—

地域環境計画 渡辺 豊博ゼミ

- 阿部 一成 地域主導による震災復興まちづくりの必要性
 —久之浜大久地区を事例として—
 荒川 泰隆 T S U T A Y A 図書館を一例とした公共図書
 館の将来像
 池田 麗菜 地域で支える学童保育 —岡山市立幸島小学
 校幸島っ子クラブを事例に—
 石岡真由美 ネパールの若者からみる課題と国際的人材育
 成の発展的可能性
 太田 裕也 伝統産業の現状と課題に向けた仕組みづく
 り—学生が主体となった郡内織物振興プロ
 ジェクト—
 桑原 舜也 上越・妙高地域における観光の現状と今後の
 在り方—滞在型観光地化への方策—
 小西 和俊 中山間地域における高齢者の社会的孤独と期
 待される寺院の役割・可能性
 —富山県南砺市を事例として—
 滝田 弘幸 ゴルフ場問題からみるゴルフ場閉鎖問題と新
 たな活用のあり方
 —閉鎖されたゴルフ場のあり方を事例に—
 古田 達矢 『愛媛県内子町における地域づくりの現状と
 今後のあり方』
 三浦 伊義 遠野のまちづくりの方向性
 —地域衰退の現状とその活性課題—
 三浦 峻太 『観光まちづくりの現状から見る新しい観光
 の在り方—富士北麓地域を事例として—』
 村松 良持 『公民館の現状における今後の在り方と必要
 性—静岡県富士市まちづくりセンターを例
 にして—』
 五十嵐雄大 地域の魅力の再発見と発信のツールとしての
 ご当地グルメ—地域再生への役割と課題—

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

- 鶴田 詩歩 国内宿泊バリアフリー旅行の課題と展望につ
 いて
 市川 康介 埼玉県東部地域の都市化と水害
 勝又 菜摘 住民主体の取り組みがまちの景観にもたら
 した効果—板橋区ときわ台を事例に—
 小徳 真 山梨県の神社と天然記念物

小林 未祐	都留市の空き家の現況に関する研究 —空き家所有者への聞き取り調査を通して—	大橋 輝士	総合型地域スポーツクラブを取り巻く現状と課題—静岡県沼津市における事例—
白井愛祐美	リビング学習と子ども部屋学習の実態と課題	金原 由佳	「同族の今～山梨県都留市小野の事例より—」
幡野 京平	社人研の長期人口予測で人口増の見られる市町村の特徴	川田 陽香	美少女キャラクターによる地域振興活動について—足利ひめたまの場合—
宮川 浩一	生活バスちばにうに関する研究	近藤 群	インターネットを利用した地域活性化について
地域社会論 田中 里美ゼミ		斎藤 志穂	スポーツを通じた障害者と健常者の交流について
伊藤 小織	かわる読書のかたち	福井 夢佳	公共交通によるコンパクトなまちづくり
伊東 穂	「貧困の子どもと親のための居場所づくりについて—2つの食支援を事例に—」	矢部 景久	「フィルムコミッションの活動を通して地域の活性化を考える」

比較文化学科 平成28年度卒業論文題目

伊香 俊哉ゼミ

一條 彩絵	特攻とその美化
大島菜奈子	吉田茂論—日本の安全保障のあり方—
大西 由唯	日独比較からみた優生思想
小泉里旺菜	ユダヤ人虐殺と南京大虐殺
関谷 莉恵	国際支援の在り方—国際支援の受容からみる現代の支援の課題—
長野 夏希	アフリカにおける紛争の勃発要因と展開に関する比較的考察—ソマリア、スーダン、シエラレオネを事例に—

志村三代子ゼミ／宮本 明子ゼミ

遠藤 勇平	21世紀に好まれる主人公 —主人公の分析とその背景—
河野 有紗	食から見るディズニーパーク
佐藤 秀美	スタジオジブリ作品にみる理想の女性像
島田 正秀	北海道の妖怪について
高杉 真由	ジェンダーとファッションの関係性について考える
田中 雅喜	長野県における食虫文化のこれから
中須 譲一	日本のゲームに登場する神の原典からの変化
番場 海里	婚活が必要な時代—結婚難の原因を探る—
前野 愛美	レズビアンとメディア ～なぜ彼女たちはお茶の間に映らないのか～
南 さくら	現代に残る忌み名 —サブカルチャーへの反映—
渡部 佳澄	人形道祖神研究 —秋田県のカシマサマを中心に—
山本 朋枝	『ジャニーズ』とは何か —2000年代におけるアイドル論—
高橋 洸圭	『2.5次元演劇』の可能性

山本 芳美ゼミ

望月みさと	『竹取物語』と『かぐやひめ』 —古典文学の児童文学化と昔話化—
井藤 淳美	サブカルチャーから見る学校制服 —ヤンキー文化からカワイイ文化へ—
金井 優花	群馬県における火葬場と霊柩車の研究
唐澤 慧衣	人とロボットの関係性 —ロボットは友か敵か—
川原 麻由	フェロモン—その語りの文化人類学的分析—
小長谷麻衣	資格ブームと音楽療法
菅宮万理江	眼鏡の社会イメージの変遷—「インテリの象徴」から「おしゃれの道具」へ—
曾 麦 多	色彩における日中文化の差異 —白、赤、黒、青、黄、紫色を中心に—
茂手木詩歩	右と左に関する研究 —日本における尊卑観の変遷—
山下 華奈	「孤食」と「おひとり様」—1人で平気?—
吉浦 草太	因幡の傘踊りの普及と継承 —農村での民俗芸能の継承の課題—
渡邊 英太	なぜ男は弱みを見せられないのか

邊 英浩ゼミ／李 相旭ゼミ

荒屋敷真代	韓国と日本の民主主義
山本夏菜英	尹東柱について
赤坂奈菜絵	絵本・童話から比較する日本と韓国
神島 美月	「千と千尋の神隠し」論 —「現代日本」という視覚から—
穴戸 咲希	日本における観光産業
辛 炫 周	日本と韓国における文化の比較研究：妖怪と象徴
鈴木 結女	食糧問題とベンチャー企業
楊 正 峰	中国人の面子意識

水野 光朗ゼミ

- 天羽 弘樹 アメリカの黒人差別
井上 優希 マンネル Heim とフィンランド
河野 佑貴 ファッションについて
桐原 良平 グローバル時代における人の移動
鈴木 千明 中国の教育の現状
當田 康人 平和安全法制と日本の安全保障について
島山 智貴 地域密着型スポーツクラブ松本山雅 FC が地域に与える影響
古田 智也 目に見えぬ病
—ギャンブル依存症と現代社会—
松本 理歩 オリンピックの歴史
真鍋 瑞穂 月江寺駅周辺の街並みについて

内山 史子ゼミ

- 黒澤 駿 シンガポールの多文化共生社会実現への取り組み
保科まどか ベトナム経済の発展と今後の展望
浅見文美華 ベトナム統一後における日本語教育とその事例の考察
加藤 雅己 カンボジアの貧困問題と今後の貧困削減の展望
河本 拓実 フィリピンにおける日本企業進出の可能性
中山めぐみ 世界遺産の観光が周辺地域に与える影響
—カンボジア・アンコール遺跡を事例に—
瀬川麻里奈 ベトナム産コーヒー豆の価値向上 —ベトナムのコーヒー産業の発展から考える—

岩崎 正吾ゼミ

- 赤石 悠希 サッカーにおけるプレースタイルと文化・伝統との関係—イングランド、スペイン及びブラジルを比較して—
兼島なのは 現代日本社会で求められるリーダーシップ
—企業におけるリーダーシップを通して—
五味潤くるみ 保育園・保育士の現状と課題
—待機児童の解消に向けて—
高橋 剛 震災における災害弱者たる外国人への支援と対策
西村 和高 現代アメリカにおける黒人差別の変化
—人種主義思想の崩壊から黒人は本当に自由になったのか—
林 綾香 児童養護施設における養育と自立支援
—虐待を受けた子どもの心のケアについて—
肥田 菜里 民族紛争の解決の糸口に関する考察
—ジョージア（グルジア）における民族紛争を事例として—
松田 直樹 日本の英語教育は生きていく上で本当に必要か—英語に関する先入見と矛盾に焦点を当てて—
山下 桃香 小学校における外国語必修化の是非に関する考察
結城真由子 地域言語政策からみる地域語の衰退と発展
—方言を誇れる言葉とするために—

分田 順子ゼミ

- 加藤 芳郎 キベラスラムに育つ子どもたちの就職機会創出を目指して—ケニアにおける就学・就職の現状からの展望—
小野田恵史 婚姻関係を法で規定することへの問い
—「法律婚離れ」に着目して—
高橋 愛 多民族国家中国における多言語政策
—少数民族に対する双語教育を中心に—
牧野 玲美 バイリンガル社会の光と影
—ケベック州の言語的少数派アングロフォンの葛藤から見えるもの—
大岩 千紘 女性の瘦身願望はどう作られるのか
—日本の洋服サイズの変化を中心に—
尾崎 飛鳥 本土復帰後の沖縄の復興策—政府主導から県による観光政策立案への道のり—
小野 杏樹 「空き家バンク」による空き家問題解決への道—島根県江津市の事例を中心に—
岸井 沙季 JKビジネスの法的規制をめぐる2つの立場
—人権擁護 vs. 健全育成—
熊谷 彩佳 日本の温泉の国際化の現状と課題
—訪日外国人のための温泉観光をめぐる—
貞方 敦衣 パナマ文書から見る国際租税回避行為の問題
とは—タックス・ヘイブンという闇—
鈴木沙也加 外国人技能実習制度を問う—実習生搾取の実態と政府による改善策の問題点—
伊達佳奈子 世界遺産の観光開発と保全のはざま
—ガラバゴス諸島を事例として—
内藤 響 障がい者とは一緒に働けないのか
—自閉症スペクトラムのコミュニケーション・スタイルを文化相対主義でとらえなおす—
矢口 杏菜 コーヒー業界におけるフェアトレード
—ネスレ社の事例を中心として—
渡辺 科野 生活保護制度改革の方向を問う
—『ヤミの北九州方式』を事例として—

大辻千恵子ゼミ

- 阿部 千春 現代社会における LGBT 事情—誰もが好きな相手と共生できる社会を目指して—
内野 賢 部落差別の解消を目指して
—求められるメディアの差別解消への役割—
大上 恋子 メディアとジェンダー
—報道番組を中心に—
河西 聡子 肥満児減少を目指すアメリカ合衆国の取り組み—子どもたちに食育を—
加藤 有貴 ミンストレル・ショー—人種のステレオタイプとその解釈の変遷をめぐる—
釜石 萌 「美しさ」を求められ続ける女性
—テレビCMにみられるジェンダー—
龍澤 史菜 結婚制度を問う—異性婚と同性婚—
成内 志帆 辰巳芳子といのちをつなぐ食
—私たちのこれからの幸せ—
西本あかね 日本における在住外国人の子どもたち
—今、求められている教育支援とは—
野村 周平 ジャッキー・ロビンソンの挑戦
—人種差別と戦い続けた人生—
松岡 祐希 アメリカにおけるアフターマティフ・アク

- シヨンの再考—ミシガン大学をめぐる判決を事例にして—
山田もも子 「オキナワ」でつながる人々—越境するウチナンチュの魂—
- 後藤 千織ゼミ**—————
- 池水 恵 アメリカ映画で描かれる「働く女性」像と現代への影響：第三波フェミニズムがもたらしたもの
遠藤佳奈子 TRPG の利用：きっかけとしてのゲーム
加藤 聡子 アメリカにおける黒人差別：『犯罪』を貧困と司法から考える
可児竜太郎 顔に対する認識と好みの変遷：女性の化粧と整形から考える
菊池 文恵 日本とアメリカにおける性的マイノリティの今とこれから
菊池 梨香 地域における博物館の役割とは：教育普及活動から考える
岸本 紗季 絵本にみるアメリカ・日本の子ども史
輿石 真帆 フェアトレード：日本のフェアトレード普及のための政策提言
深澤 僚介 ブルースからみる黒人社会と人種差別
星 和希 移民の社会統合について：アメリカとフランスの比較にみる日本の課題への考察
三日月千咲 イラク戦争帰還米兵と PTSD
森下 結 現代アメリカにおける移民政策
- 佐藤 裕ゼミ**—————
- 茂木理穂子 タイにおける災害と社会変動—脆弱性回避にあたる NGO の事例から—
金森 祐依 エスニック差別の社会史—米国のアイルランド系移民を事例として—
白石 翔子 国際結婚と異文化適応—愛媛県のフィリピン出身女性を事例として—
- 渡辺 千晶 国際都市“ヨコハマ”の発展—横浜の都市形成と中華街—
牧野 美鈴 近代化による塩業の盛衰—愛知県旧吉良町の地域社会学的研究—
松下実佐子 貧困解消に向けた市民のつながり—食品ロスをめぐる NGO に関する国際社会学的考察—
明 千加 家庭環境からみる若者の貧困—フリーターと職業選択の困難に着目して—
武藤日向子 国連アリーナにおける NGO の可能性—人道分野のサミットを起点として—
守島 早貴 ベトナムにおける国際 NGO の展開と国家—現代史の一考察—
森谷 歩美 在日コリアンのエスニック・アイデンティティ—日本名使用をめぐる社会学的考察—
成田 有希 滞日ムスリムの宗教「実践」—富山県射水市の事例を中心として—
大谷津愛美 ドイツの移民政策と社会統合の困難—シティズンシップ概念をてがかりに—
伊藤 未来 バングラデシュにおける縫製産業と女性労働者—文化規範と生存維持とのはざままで—
- 岸 清香ゼミ**—————
- 折田有佳里 現代に生きる伝統陶芸—薩摩焼の沈壽官窯を事例に—
黒澤 瑞保 地域からの発信—フリーマガジン『BEEK』が描く「やまなし」の現在—
園田 桃子 印象派絵画の受容—「新奇」のコレクションから「流行」のシンボルへ—
高橋麻奈佳 コメ文化の新展開—表参道ごはんフェスにおける「ライススタイル」の提案—
横原 実月 「在日外国人」として生き抜く児童を育てる—当事者団体「すたんどばいみー」の活動を手がかりに—

文学専攻科 平成28年度研究論文題目

佐藤 隆 先生

植田 祐介 アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた防災教育の研究

尾上 勇雄 組織（チーム）としての学級（クラス）
一個の学びと集団の学びの有機的なあり方について

栗林 恭平 メンタルケアによるいじめ自殺の回避について

吉田 真基

子どもの貧困と学校に関する考察

—学校は子どもの貧困対策のプラットフォームとなりえるか—

渡辺公太郎

灰谷健次郎の教育観

—現代教育に生かす—

大学院文学研究科 平成28年度修士論文題目

国文学専攻

長瀬 由美 先生

勇 晴美 『源氏物語』教材化の研究
—夕顔巻、乙女巻、薄雲巻の教材化の試み—

牛山 恵 先生

日下 舞子 国語教育における学校図書館を活用した読書指導の在り方

後藤志緒莉 国語教育における「読者論」と「読書行為論」の可能性と問題点

加藤 敦子 先生

鈴木 美咲 西鶴作品における「かみなり」

社会学地域社会研究専攻

野畑真理子 先生

霍 凤霞 中国の都市における女性起業家の諸問題

英語英米文学専攻

儀部 直樹 先生

阿部 風詩 Whitman's Journey to endure the tragicburden.

三浦 幸子 先生

棚田 真理 A Study of L2 Learners' Update following Oral Corrective Feedback in Conversational Interaction
—対話中の教師による訂正フィードバックに続く第二言語学習者のアップテイクに関する研究—

今井 隆 先生

望月 麻衣 Recent Advances in the Genetics of Autism Spectrum Disorder with Special Reference to Language Disorders.

比較文化専攻

山本 芳美 先生

坪西 俊哉 日本の美術の歴史性について

臨床教育実践学専攻

田中 昌弥 先生

謝 嬌 関係性を通じた子どもの「自己」発見のナラティブ的探究

—学校教育の意味と役割の再検討—

※氏名、論文タイトルなどの情報を本人の希望により非掲載としている箇所があります。

講演会だより

都留文科大学国文学科主催・富士急行株式会社協賛

『文学における文字と声』

2016年11月7日(月)開催

講演者 多和田葉子先生



講演会の様子

今日もっとも活躍の目覚ましい現代作家の一人として世界中から注目されている多和田葉子先生が、今年度、本学の特任教授に就任されました。多和田先生はドイツ語と日本語を駆使して「言語間の詩的な狭間」をテーマにし、コミュニケーションやアイデンティティの問題に鋭く迫る作品を発表して来られました。多くは国境や言語を自在に越えて移動しながら新しい価値を生み出していくスリルに満ちた世界ですが、その際の「つまづき」のようなものからも何かを発見してしまう愉快さにも魅力があります。今回は「文学における文字と声」と題して、自作の朗読も交えたお話で最先端の文学世界に案内してくださいました。

冒頭に「色々なところに向かって走っている言語が出会い、すれ違うところ」という文学観・翻訳観が示されたのち、次第に会場がそのような現場として演出されていきました。い

ま私たちは文学を「音」から味わうことが少なく、日常のコミュニケーションでも「声」が失われつつありますが、視覚に偏重した背景として日本語には同音異義語が多いという難点があるとしても、逆にそれを利用して新しい面白さを生み出すことができるかもしれません。朗読された『人身事故』という詩は、「死体／～したい」「処理／ぐっしょり」など、音によって言葉を自在に変身させていく試みですが、単なる言葉遊びに留まるのではなく、血の通わない熟語に抑圧されがちな感情といった、私たちの身近にある問題を浮かび上がらせる仕組みになっています。また、日本語の特色は擬音語や擬態語が品詞のカテゴリーから独立して存在しているかのような音の豊富さにあり、それを活かさない手はありません。(ただし先生は、その伝統を土着と外来の混交と捉えて「がらくたが集まった翻訳文学という多文化テキストのよ

うな面白さ」と言っています。)その実例として、チャーホフの戯曲『かもめ』を手遊び歌のリズムに合わせて翻案した詩や、狂言『魚説教』に着想を得て現代の政治談義風にアレンジしたテキストが、ユーモラスでかつ鋭い批評性を伴ったメッセージを織り込むようにして朗読されました。

全学の学生や教職員、一般の方々に溢れた会場からは、多和田先生のお話のテンポや声音に魅了されるうちに言葉の生命力や文学の可能性を改めて実感したという感想や、資料を一切用いない講演なのに文字の不思議さを想像させてやまない内容だったといった声が聞かれました。いま振り返っても一回性の強い生々しい臨場感はお伝えしにくいものがありますが、現場に居合わせた人はそれについて語り合わずにはいられないような、まさに言葉の世界に誘われる貴重な時間となりました。

(国文学科准教授 野口哲也)

講師紹介



多和田葉子 (たわだ ようこ)

1982年に早稲田大学第一文学部卒業後、ハンブルグに移住。現在はベルリン在住、ドイツ語と日本語で並行して創作を行う。1991年『かかとを失くして』で群像新入文学賞、1993年『犬婿入り』で芥川賞を受賞。『ゴットハルト鉄道』(1996年)は、山岳鉄道として富士急行と提携しているマッターホルン・ゴットアルド鉄道に触れた作品。2000年にはチューリッヒ大学で博士号(ドイツ文学)を取得。都留文科大学特任教授に就任した2016年にはドイツでクライスト賞も受賞。小説や詩の執筆だけでなく、パフォーマンス性の高い朗読でも人気を集めている。

講演会だより

2016年 国語国文学会主催講演会

『正確な日本語 —詩と文法—』

2016年11月16日(水) 開催

講演者 藤井貞和 氏



会場写真

今回、学生時代からずっとお世話になってきた藤井貞和先生を本学にお招きすることができて、学生の皆さんにとっておきの贈り物が出来たような、幸せな気分です。「正確な日本語」という演題が既に、藤井先生ならではの洞察を思わせるもので、きっと一般的な意味での「正確／不正確」という尺度をひっくり返して下さるんだろうな、と講演会当日が楽しみで仕方ありませんでした。実際に、日本文学の長大な歴史を見晴らかしつつ、時代によって変わる表層的な「正しさ」ではなく、日本語の深層にある屋台骨(助詞や助動詞)の「正確」な姿を見極めようとする、大変なスケールのお話が展開されました。万葉集や『源氏物

語』から、最先端の現代詩までを一貫した切り口のもとに検証するなどという作業は、普通感覚では結構な離れ業に思えますが、古典文学研究者で、なおかつ第一線の現代詩人でもある藤井先生の学問的・実践的視野からすれば、必要かつ必然的な手続きと言えます。今回、古典文学から現代文学、日本語学まで多様な関心を持つ学生たちが、それぞれの関心に応じて熱心に話を聴き入っていたのがとても印象的でしたし、詩なら詩、文法なら文法、と細分化されない、本来の豊かな専門性に支えられた学問の魅力を共有できたひとときを本当に嬉しく思いました。

私が藤井先生にはじめてお目にかかったのは、先生が東

京大学を退職なさったあと、ご自宅の書庫で開催されていた勉強会でのことです。ここでは文学だけでなく、哲学、歴史学、言語学を専門とする人たちが、書庫の床に座り込んで夜遅くまで議論を戦わせていました。専門性というのは、必ずしも同じ方面の専門家の集まりの中だけで鍛えられるものではないと、私はここで学んだと思っています。学生の皆さんには、私が藤井先生から頂いたような幅広い刺激を受けながら、各自の専門領域を磨いてほしいという思いを新たにしました次第です。

また今回、藤井先生はご講演の最後に、現代詩や現代文学の意義に関わる質問を受け、多和田葉子先生のお名前を挙げながら、詩を大事にしている小説家が世界を支えている、とお答えになりました。この一週間前に国文学科は多和田先生もお招きしていたわけですが、日本語を根底から見つめ直しながら世界に向き合うという点で、お二人のお話は深く響き合っていたと思います。あらためて、貴重なお時間を下さった藤井先生に、心から御礼申し上げます。

(国文学科講師 田口麻奈)

講師紹介



藤井貞和 (ふじい さだかず)

一九四二年東京生まれ。詩人、国文学者。東京学芸大学・東京大学・立正大学の各教員を歴任。東京大学名誉教授。一九七二年、『源氏物語の始原と現在』で注目される。二〇〇一年に『源氏物語論』で角川源義賞受賞。詩人としては、『ことばのつえ、ことばのつえ』で藤村記念歴程賞および高見順賞、『甦る詩学』で伊波普猷賞、『言葉と戦争』で日本詩人クラブ詩界賞、『春楡の木』で鮎川信夫賞および芸術選奨文部科学大臣賞など

数々の賞を受賞。そのほか『物語の起源』、『タブーと結婚』、『日本語と時間』、『文法的詩学』、『文法的詩学その動態』、『日本文学源流史』、『構造主義のかなたへ』、『日本文法体系』など近刊多数。

講演会だより

2016 年度 英文学科・英文学会共催後期講演会

『World Englishes』

2016年12月9日(金) 開催

講演者 Dr. Kolawole Olagboyega



講演会の様子

この講演会では「World Englishes」を題に、山梨学院大学教授で、本学の非常勤講師でもあるコーラ先生が、英語の成り立ち、World Englishes とは何か、そして英語を学ぶ上で必要なことを話してくださいました。

英語の語源はアングロ・サクソン語、フランス語、ラテン語、ヴァイキング語とギリシャ語から来ていて、それぞれの部族が今のイギリスに侵略してきたときに伝わり、後にイギリスで独自に発達した。そして、英語は Lingua Franca : 世界共通語にまで発展した。言語学者 Braj Kachru の定義によると、World Englishes の英語を使う国々は3つに分類される。Inner Circle、Outer Circle と Expanding Circle である。Inner Circle には、母語として英語を使う国々が分類される。Outer Circle は、英語を

第二言語とし、英語を教育、行政、ビジネスなどに使う国々。3つ目の Expanding Circle には、英語を外国語として学ぶが、基本的には母語を使う国—日本もそのひとつ—が含まれる。

英語の種類として、アメリカ英語とイギリス英語が一般的に知られているが、同じ物でも呼び方が異なっていたり、同じ単語でも発音が異なっていたりする。他の国々にも違いが出ている。例えば Inner Circle にあるカナダでは、アメリカ、イギリス英語の両方が使われているのだが、話し言葉と書き言葉で使い分けている。第二言語として英語を使う Outer Circle のアジアの国々では、それぞれの母語の特徴が、その国の英語に訛りのような形で影響をもたらしている。

Kolawole 教授が研究しているジャパニーズイングリッシュの話し言葉では、英語の単語を

カタカナ英語として使ったり、単語の省略や複合など、独自に変化させた英語に近い言葉を用いることがある。文法上、日本人が特に間違いやすいのは冠詞の脱落、不必要な挿入、代用の三点だそう。これらは日本の新聞記事や大学の教授などが書く正式な文章にもみられることがある。しかしこれらの間違いが起きるのは、日本語の文法にはない用法だからで、これらはジャパニーズイングリッシュが存在するといえる根拠である。これから英語を学び、英語を使う職業に就きたい若者はこれらのことを認識しなければならない。最後に英語を学ぶ上では、語彙を増やすことがもっとも必要なことであると教授は話された。会話をするときには正確な文法が分からずとも、単語を言えば大体のことは伝わるし、多少なりとも文章を読むこともできる。しかし単語が分からなければ、文を読み、話すことすらできないのである。

講演会の最後での質問コーナーでコーラ先生は、日本語は他の言語よりも様々な国の言葉を取り入れているため、英語の次に Lingua Franca になり得る、そして日本人は英語の正しい発音を学ぶ傍らで、今のカタカナ英語の文化をも発展させることが大事だとおっしゃっていた。

(英文学科 2 年

メンドーザ・カイレ)

講師紹介



Dr. Kolawole Olagboyega

ナイジェリア出身。1994年ケンブリッジ大学にて修士課程修了、2000年シェフィールド大学にて博士課程修了。北キプロス・アメリカン大学准教授、国際教養大学准教授などを経て、現在山梨学院大学教授、都留文科大学非常勤講師を務める。

講演会だより

2016年度 ジェンダー研究プログラム主催講演会 『なぜ外国人家事労働者が必要なのか？』

2016年12月7日(水) 開催
講演者 小ヶ谷千穂 氏



講演会の様子

2016年度のジェンダー研究プログラム主催の講演会は、12月7日、小ヶ谷千穂さん（フェリス女学院大学文学部教授）をお迎えして開催し、「なぜ外国人家事労働者が必要なのか？ーグローバル化するケアと私たちの働き方」と題した講演をしていただきました。約40人が参加し、講演後に会場で小ヶ谷さんを囲んで行われたお茶会にも、短時間ではありましたが多くの学生が参加し、なごやかな雰囲気の中で話が弾みました。

小ヶ谷さんは、日本やフィリピンなどで、家事や育児などの再生産労働に携わる労働者についての調査研究が続けられています。再生産労働の賃金労働者とは具体的には、家事や育児を担ういわゆるメイドさんのことを主に指します。ほとんどが女性ですから、再生産労働にまつわる諸問題は、ジェンダーに密

接にかかわっています。再生産労働を人を雇って委託することは日本ではまだ馴染みが薄いですが、アジアでも多くの国の中流以上の層ではごく当たり前に行われており、担い手の女性たちは、相対的に貧しい国や地域の出身者であることが多いのです。

講演では、グローバル化した世界のなかでこの業界でも国際分業が進展していること、外国で働く移住家事労働者が広がっていること、彼女たちの労働環境には様々な問題点があること、日本でも「家事支援人材」の受け入れが今後進むと考えられること、そしてそれをめぐる課題と私たちが考えなければならぬポイント等について、具体的事例を紹介しながら分かりやすくお話いただきました。

家事や子育て等を外国人労働者に頼む時代が来るかもしれない、というのは、とくにこれか

ら家庭や子どもを持つことになる学生たちにとっても関心の高いトピックで、参加者は熱心に講演に聞き入りました。小ヶ谷さんは、私たちひとり一人が、自分自身や家族の心身の健康等の「メンテナンス」についてどう考えているか、そして「メンテナンス」を担ってくれる人の労働の価値をきちんと認めているかを見つめなおすことの重要性を指摘し、グローバルに展開する再生産労働を、国境を越えたジェンダー平等の課題として捉える視点を示してくださいました。少子高齢化の日本の社会が「よりよく持続していく」方策を考えるにあたっての重要なヒントを与えていただいた、刺激的な講演会でした。

(社会学科教授 平林祐子)

講師紹介



小ヶ谷千穂（おがや ちほ）

1974年生まれ。1997年一橋大学社会学部卒業。2003年一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。横浜国立大学教育人間科学部准教授を経て、現職。専門は国際社会学、国際移動論。主にフィリピンからの人の移動を中心に、香港やシンガポールなどに家事労働者として働きに行く女性たちの組織活動や、出身家族との関係について研究。最近は、ヨーロッパや北米で暮らすフィリピン人移住者のネットワークや、国境を越えて移動する子どもたち、「ダブル」「ハーフ」と呼ばれてきた若者たちの語りをもとにしたアイデンティティ研究を進めている。主な著書に『移動を生きる：フィリピン移住女性と複数のモビリティ』（有信堂高文社2016年）、『国際社会学』（有斐閣・共編著2015年）など。

文大だより

卒業演奏会を終えて

初めて卒業演奏会を見たときは4年生の偉大さに圧倒されてしまいました。大きな舞台に立ち堂々と演奏する姿はとても輝いており、「いつかあんなふうに演奏できるかな」と夢見ていました。しかしいざ自分が4年生となり卒業演奏会を行うとなると、不安と焦りでいっぱいになりました。本番が近くなるにつれその気持ちは増していくばかりで、練習をいくらしても足りない自分を情けなく嫌になりました。楽しい事苦しい事ありましたが一緒に頑張った4年生や専攻生、熱心に指導して下さった先生方に支えられ本番までくじけずに頑張りぬくことができました。本番では今までの演奏会の中で1番楽しく演奏することができました。最後の合唱では会場全体の気持ちが1つになったことを感じ、とても幸せな時間を過ごすことができたことを嬉しく思います。卒業演奏会を通して周りの人の支えがあったから今の自分があるのだと深く感じました。今まで支えて下さった皆さまに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



卒業演奏会にてお世話になった先生方と

(初等教育学科音楽専攻4年 三浦綾乃)

卒業制作展を終えて
— 魅せる作品作り —

私は本学で2年次に図工・美術専攻を選択し、彩画・版画・彫塑・工芸・鑑賞・デザインなど、様々な美術分野に触れながら学びを深めてきました。3年次からは平面造形ゼミに所属し、平面の中での表現活動に取り組みました。

美術の魅力の一つは、知識や技術を取り入れて自分のものにし、そこから自分の思いや考えを織り交ぜて、新たなものを生み出し、伝えることができる点だと考えます。日常のすべてのものから刺激を受け、今度は発信する立場になる面白さがあります。自分の思いや言葉だけでは言い表せないことを、図工・美術を通して表現できる楽しさを教えたいと、教育実習や学習支援ボランティアを通して、改めて感じました。

この1年間は、卒業制作展「LOOK. — 私たちが見つめてきた作品 —」に向けた作品作りをしてきました。日本絵画に心を魅かれていたため、題材として「風神雷神図」を用いて、切り絵という新しい要素を加えて制作に取り組みました。制作は時間がかりつつも順調に進みましたが、最も頭を悩ませたのが展示方法でした。何度も先生や友人に相談をし、どのような方法で見せることによって、自分の考える雰囲気観る人に伝えられるかということ、何度も試行錯誤しました。これほど時間をかけて、真剣に作品と向き合うのは初めてといえるほど、エネルギーを注ぎ、最後には納得のいくものを作ることができました。作品を鑑賞してくれる人の存在があるからこそ、展示についての多くの学びができ、とても良い経験をする事ができたと思います。

図工・美術専攻の仲間も、全員が力と想いを込めて制作をしました。ゼミのない時間も自主的にアトリエに通ったり、自宅に持ち帰って制作をしたりする仲間の姿を多く見かけました。また、一人一人の個性が違うからこそ、同じ空間を共有することの難しさも体感しました。お互いの作品良さを生かし、関係性を持たせるために、鑑賞者目線に立って、みなで展示計画をして、一つの展示会を作り上げることができました。展示会には地域の方をはじめ、大学関係者、お世話になった方々、家族や友人など多くの方が足を運んでくださり、「圧倒された」、「素晴らしいかった」など、たくさんのお褒めの言葉をいただくことができました。

私がのびのびと制作できたのは、指導して下さった先生方や、良い刺激のし合える仲間がいたおかげです。素敵な環境のなかで学びができたことを、本当に嬉しく思います。

最後に、お忙しいなか卒業制作展にご来場いただいた方々、制作展に関わって下さった関係者の皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

(初等教育学科4年 廣本順亜)

文大だより

イギリス遊学を終えて ～「手作りの旅」で得たもの～

3年次の春休み、大学の遊学奨励金制度を利用して1ヶ月間イギリスに行き、図書館を訪ねて回りました。最大の目的は、卒業論文のための事例集めでした。さらに、図書館司書を目指していたことや、かねてからイギリスの暮らしに興味があったこともあり、将来のためという思いや、自分の知的好奇心を満たしたいという思いもありました。そのようなことから、宿は民家の一室に泊めていただく形をとったり、移動手段は極力街を見て歩ける手段にしたりと自分なりの工夫をしました。今回の旅は、何の旅行パックも使わず、ゼロから全て自分で組んで行く形をとりました。1人で全ての手配をし、行った先で何が起っても自分で対処するという経験は初めてで、戸惑いと心配の連続でした。しかし裏を返せば上記のような細かなこだわりを含め、1ヶ月間を全て自分のやりたいことに捧げられるということでもありました。また、準備の段階で経験したことは自分の「生きる力」として確かに身についたと感じています。

調査のために3つの都市を選び、公共・大学・国立図書館の3種の図書館を合わせて16館訪ねて回りました。訪れるなかで、特に公共図書館における多文化サービスに注目し、図書館員の方や地域の日本人コミュニティの方にもお話を伺うことができました。イギリスは日本に比べてはるかに大きな多文化社会で、道を歩いていても英語以外の様々な言語が飛び交っていました。また、図書館サービスにおいても興味深いことばかりでした。私が訪れたほとんどすべての公共図書館では、職を得るための講習や、まだ英語の能力に不安がある住民に向けての英会話講座を無料で開いていました。また、地域のコミュニティとの関わりも深く、地元の日本人コミュニティと連携して日本文化の体験イベントを開く図書館もありました。日本でも例がないわけではないサービスも多くありましたが、私はその普及率にはまだ違いがあるのではないかと感じました。この点に関しては、次の研究課題としてこれからも調べていきたいと考えています。これから国内の労働人口の減少や国際化の進行などが進む可能性が高いことを考えると、図書館からも多文化共生社会に対応できるような仕組みが必要になってくるのではないかと考えます。図書館はその土地で生活していくための情報収集の砦となるだけでなく、異なる文化的背景をもつ複数の人々の架け橋ともなりうる場所だからです。これからも仕事をしながら学び、日本に合ったものを模索していきたいと思えます。

この旅では、1人で様々なことに対処することができるようになった一方で、本当に多くの方々に支えていただき、人とのつながりの大切さを痛感した旅でもありました。この場をお借りして、感謝の意を述べさせていただきます。本当に、ありがとうございました。

(英文学科4年 藤田紗英)



カーディフ中央図書館の図書館員さんと



大英図書館の職員用オフィスのボード。
特別に入らせていただいた。

文大だより

**被災地支援 都留文科大学合唱団
クリスマスコンサートに同行して**

コンサートの様子

12月17日、18日の2日間、宮城県牡鹿郡女川町立女川小学校・石巻市立大須小学校において都留文科大学合唱団によるクリスマスコンサートが開催されました。被災地の同窓会宮城県支部から“被災者の心のケアのため都留文科大学合唱団のコンサートを行ってほしい”“8年連続全国大会金賞を受賞し、今年度は日本放送協会賞も受賞した歌声を被災者に届けてほしい”との依頼を受けたもので、同窓会役員会、理事会で支援決議を受け、また合唱団

顧問・指揮者の清水雅彦先生から「ぜひ行わせていただきたい」という返事もいただき、実施に向け打ち合わせを重ねてきました。

1日目の宮城県牡鹿郡女川町立女川小学校では、ジングルベルから始まり、コンクール金賞受賞曲、「やさしさに包まれたなら」、「春よこい」、「ひこうき雲」、「きよしこの夜」などが披露され、歌のすばらしさにより、被災者を元気にしたいという気持ちが伝わったことに心打たれました。

2日目の石巻市立大須小学校では、今年度末で小学校と中学校が閉校となるため、閉校記念事業の一環として行われ、大須小学校の児童や大須中学校の生徒、地域住民の方々が200人程集まりました。地元の大郷ママさんコーラスの方々による「宮城県民歌」から始まり、「ふるさと」、「北国の春」の披露に続き、本学の合唱団による「ジングルベル」、「大須小学校校歌」、「大須中学校校歌」、コンクール金賞受賞曲、「サンタがまちにやってくる」を披露し、心の復興を目的に日本一の美しい歌声により、被災した児童・生徒や地域の方々を励ましました。

コンサート終了後には、餅つき大会、昼食大会（餅パイキング・浜焼き等）、プレゼント抽選会が行われました。

2日間にわたる合唱団によるコンサートの歌声は、復興へ向けての被災者の励ましと心の安らぎとなり、心温まる被災地支援活動が無事終了することができました。

この支援につきまして、同窓会宮城県支部では、コンサート実現のために、実行委員会を組織し、多くのボランティアの方々が参加し、綿密な計画の作成、会場準備、コンサート運営、合唱団宿泊所手配、昼食・朝食の準備等、支部の総力を挙げて取り組んで頂きましたことに心からお礼を申し上げるとともに、同行させていただき、多くの感動と出会えたことに感謝いたします。

(総務課長補佐 小林泰憲)

文大だより

県民コミュニティーカレッジを開催

県民コミュニティーカレッジ地域ベース講座「いきいきと幸せに生きるために：心理学のすすめ」を2号館2102教室で全4回開催し、延べ147名が受講しました。

今年度の県民コミュニティーカレッジは、初等教育学科の中川佳子教授が講師となり、第1回は「脳と健康」、第2回は「ストレスと健康」、第3回は「姿勢と健康」、第4回は、「コミュニケーションと健康」の4つのテーマで講義が行われました。

健康と脳・ストレス・姿勢・コミュニケーションの関係を心理学的視点から解説し、こころを健康に保つための簡単な課題の提案や、簡単な心理テストの実施など、生き生きと幸せに生きるためには心と体の何に気をつけたらいいかについて考えていきました。

講座の様子や参加者の感想は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。



ムササビ観察会を開催

地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門主催のムササビ観察バスツアーを11月18日（金）と12月3日（土）に開催し、延べ49名が参加しました。

当日はCOC推進機構の北垣憲仁特任教授とフィールド・ノートの学生がムササビの生態の解説をした後、バスで鹿留にある今宮神社へ向かいムササビを観察しました。ムササビが滑空するたびに、参加者からは感嘆の声が上がっていました。

観察会の様子や参加者の感想は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。



文大だより

**市民公開講座（地域交流研究センター
暮らしと仕事部門）を開催**

市民公開講座「都留市の水環境－地下水学の基礎と東桂地区の水環境－」を自然科学棟 S6 教室において、地域交流研究センターの暮らしと仕事部門と郡内地方研究会の共催で全 2 回開催し、延べ 24 名が受講しました。

この講座は、COC 推進機構特任教授の内山美恵子先生が講師となり、第 1 回目は「地下で水はどのように流れているか」、第 2 回目は「都留市東桂地区の地層の分布と湧水のはなし」と題して、目に見えない地面の中を流れている水について、基礎的な部分から専門的な知識まで最新の研究データを踏まえてわかりやすく解説しました。



都留市の水について興味を持っている方々が多く参加してくださり、活発な質問や意見が飛び交う講座となりました。

講座の様子や参加者の感想は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。

地域交流研究フォーラムを開催

第 12 回地域交流研究フォーラム「Q-U を活用した学級支援及び学校支援のあり方」を 2 号館 2102 教室において、12 月 10 日（土）に開催しました。

12 回目となる今回は、個人や学級の状態を把握し、よりよい学校生活の支援につなげるために開発された心理テストの Q-U をテーマに開催しました。

山梨県内で Q-U を実際に教育現場で活用したり、普及活動をされている 4 名の先生方に Q-U について紹介してもらい、Q-U 研究者のコメントや先生方と参加者との交流を通して、Q-U 結果を活用した効果的な子どもたちの発達支援や、今後効果的に活用していくために克服すべき課題について考えました。

司会・進行は、地域教育相談室の担当教員である COC 推進機構の品田笑子特任教授が行いました。

講座の様子や参加者の感想は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。



文大だより

edcamp を都留で開いて

edcamp は、教育に興味がある多種多様な人が集まり、教育について語り合い、アイデアや知識を共有するイベントです。2010年から1000回以上、80以上の国と地域において世界各地で開催されており、「世界一アツい教育イベント」と評する人もいます。日本語での開催は2016年9月に行われたedcamp 鎌倉が初でした。そしてedcamp 都留は、それに続く第2弾です。

私たち国語教育学ゼミは、edcamp の運営側として関わり、同時に参加者の一員として、熱く教育を語り合いました。edcamp には、実に多種多様な人々が集まります。実際にedcamp に訪れた人々は、学生や教員だけではなく、一般企業の方、保護者、政府関係者、大学教授などでした。その分、多様な意見が集まります。この一日だけでかなり考えが深まりました。

2017年1月にはedcamp Tokyo が開催され、また、2018年には第2回edcamp 都留を開催します。edcamp 旋風が今、ここで、起こり始めています。edcamp から、必ず日本の教育の未来を変えていけると、確信しています。



edcamp つるクロージングの様子

(国文学科4年生 浅野恵理)

「郡内織物手織り体験会」開催

郡内織物振興プロジェクト「Weave」の主催する「郡内織物手織り体験会」が地域交流研究センターの後援で1月24日に開催されました。およそ半日の開催時間で106名というたくさんの方にお越し頂き、イベントが大盛況となり非常に嬉しく思っております。

「Weave」は2013年の夏に発足した文大生によるグループです。山梨県郡内地域の伝統産業である郡内織物について研究、PR活動を行っており、「もっと文大生に郡内織物を知ってもらいたい」という思いから今回のイベントを企画しました。交流を行ってきた地域の方、生産者の方らと共に、前年の内から準備を進めてきました。

イベント名の通りイベントの主な内容は手織り機を使ったコースター作り体験です。織物づくりと言えば昔はすべて手作業です。作品を作り上げる中で、そうした苦労や作品を作った先の達成感というものを感じ取って頂けたなら、それ以上のものはありません。

今回イベントの開催にあたり学内外の皆さんにご協力を頂き、こうしてイベントの大成功が得られたと感じています。この場を借り、感謝申し上げます。

(郡内織物振興プロジェクト Weave 代表 社会学科 環境・コミュニティ創造専攻4年 太田裕也)



パネル・制作品展示



手織り体験の様子

文大だより

「都留文科大学・同窓会」と
「道の駅つる」がコラボしました。

都留市にオープンした『道の駅つる』の農林産物直売所において、昨年12月26日(月)～30日(金)に本学の同窓会と『道の駅つる』のコラボ企画が実施されました。このコラボ企画は、全国の同窓会支部の皆さまにご協力頂き、今後も実施される予定です。また、企画の詳細について、都留市の高部剛産業建設部長(株式会社せんねんの里つる^{※1}代表取締役)からご紹介頂きます。



都留文科大学同窓会支部長の逸品

昨年11月にオープンした『道の駅つる』は、地元の新鮮な野菜など地域の産物を中心に品揃えされた農林産物直売所とそれらの素材を活かした料理を提供するレストランを兼ね備えた施設となっております。

さて、都留市には大切に育て上げた全国区に誇れる「タカラ」があります。一昨年、創立60周年を迎えた「都留文科大学」です。中でも特筆すべきは、全国に39の同窓会支部を有し、支部長以下の役員は地域の名士等で、社会的認知度の高い方々ばかりの同窓会組織です。

『道の駅つる』では、同窓会及び都留文科大学の協力を得て「都留文科大学同窓会各県支部長がお勧めする地元の逸品」と題してリレー方式で全国の産物を紹介、販売する取り組みを試行的に行う事といたしました。その第一弾として本市には海がないことから隣接する静岡県支部にご協力をお願いしたところご快諾をいただき、白井支部長の住んでいる下田市の干物の名店「小木曾商店」の干物を昨年未に販売し、好評を得たところであります。また、偶然にも下田市と都留市との歴史的な繋がり(縁)^{※2}についても改めて紹介することができ、とても意義のある取り組みであったと考えています。

引き続き、都留市の「タカラ」である大学並びに全国の同窓会支部等のご協力をいただき、現役学生にもお手伝いをいたさず『道の駅つる』ならではの名物イベントとして定着できますよう努めてまいりますので、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

株式会社せんねんの里つる 代表取締役 高部 剛(都留市産業建設部長)

※1 「(株)せんねんの里つる」は、「道の駅つる」の運営会社

※2 「伊豆下田を救った天野開三」開三氏は、文化11年(1841年)に境村(現 都留市境)の名主の家に生まれた。品川台場(お台場)建設において大きな利益を得たとされており、安政元年(1854年)の大地震で大きな被害を受けた下田に米500俵、布団500枚、鍋167個をいち早く救援物資として贈っている。この時の鍋は「天野鍋」又は「海蔵鍋」として今でも大切に保存されており、大津波の恩人として今なお下田では開三の遺徳を顕彰しています。

編集後記

小水力の聖地・都留

高橋 洋

前号で山口先生が「都留と水のこと」と題した編集後記を書かれていた。私の専門は再生可能エネルギーや電力事業に関する公共政策だが、この「業界」で都留といえば、小水力の聖地として有名なことをご存知だろうか。

水力発電については多くの方がご存知だろう。大規模なダムを造り、水流の落差を利用して発電する。山がちな日本では戦前からダム式の水力発電が開発されてきたが、適地が減り今後の拡大の余地は小さい。対照的に小水力は、小さな川や用水路などでの小規模な発電方式になる。枯渇の心配がない再生可能エネルギーであるほか、設置箇所が無数にあり、自然環境への影響が小さく、初期投資が少なくてすむ。一方で小規模

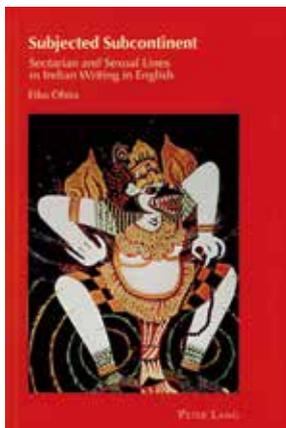
であるがゆえに発電コストが高く、水利権などの手続きが煩雑なことが、導入の壁となってきた。

しかし地域活性化の観点からは、地域固有の再生可能エネルギーの利用価値は高い。中小企業や市民団体でも取り組み易く、地域に雇用や利益を生む。利用手続き面で自治体が果たす役割も大きい。福島原発事故後の再生可能エネルギーの見直しや電力の固定価格買取制度の導入により、小水力が注目を集めるようになったのである。

都留では、全国的な再評価が進む以前から小水力に取り組んできた。2001年に市民が都留水エネルギー研究会を開催し、家中川を活用した地域づくりを議論してきた。これを受けて市は2003年に「都留市地域新エネルギービジョン」を策定し、小水力発電で町おこしをするようになった。

これまで市役所前を始め3箇所以小水力発電を設置し、財源に市民参加型の公募債も活用してきた。小水力というエネルギー自体は至る所にあるが、原発事故前からこのような取り組みをしてきた地域は珍しい。そのため都留に注目が集まり、一時は他の自治体などから視察が殺到したという。しかし2012年に3号機ができてからは取り組みが滞っている。

私が都留に着任してから早くも2年が経とうとしている。小水力以外に都留には木材資源（バイオマス）もある。昨年4月から始まった電力の小売自由化と関連づける手もあるだろう。地域に根ざしたエネルギー事業にどのような可能性があるか、都留で何ができるか、引き続き考えていきたい。



大平栄子 著
2016年発行
PETER LANG 社

◇おおひら えいこ
英文学科 教授

Subjected Subcontinent



伊香俊哉 著
2016年9月発行
社会科学文献出版社

◇いこう としや
比較文化学科 教授

战争的记忆

本
ぶんだい堂お詫び
と訂正

都留文科大学報第132号の内容に誤りがございましたので、訂正するとともにお詫び申し上げます。

裏表紙 ぶんだい堂 (正) 大島堅一・高橋洋 編著
(誤) 島堅一・高橋洋 編著